

乃木若葉 三好夏凜 楠芽吹 乃木園子

セイッ！ハッ！ヤアア！……………

「あの……今日は、どうしたんですか氏紙さん…」

「気が散ってしまいましたか？」

「いえ……はい。無言無表情でジッと見つめられると少し…」

「ううん、そうですか。残念ですが邪魔になってしまうのなら退散しますね」

「いえ、気が散ってしまうのは私の鍛錬不足のせいですから居て下さって構いません。

ただその……道場の小窓から覗き込むのは止めませんか…？」

「えっ、だって美少女しかいない道場内に入るのって聖域を汚すようで気が引けますし」

「うええ…どんな目で見てんのよこいつ…」

「別にいかがわしい目で見てるわけじゃない…」

「ならどんな目で見てるってのよ」

「技術者が腕を振るう姿に見惚れるのは人の性です」

「やましいことが無いのなら中で見てください。不審者に見られてるみたいで落ち着きませんから」

「みたいじゃなくて完全に不審者でしょ若葉」

「まあ…そう言うな夏凜。きっと氏紙さんも悪気はないんだ」

「フン！まあいいわ。中に居た方がいざってとき吊るし易いものね」

彼は氏紙楓。最近勇者部に加わった男子生徒で、30年後の未来から神樹に召喚された未来人だ。たまにああして稽古を覗きに來ていたので、今日は中に上がって見るように勧めてみた。

「失礼します」

「そうだ。見てるだけじゃなく、良ければ氏紙さんもご一緒にどうですか？」

「…いえ、武道なんて大昔に授業で習った程度で、無駄に場所を取るだけで邪魔になってしまいます。私は見ているだけで十分ですから、お気になさらないで下さい」

「そうですか？」

道場に上がるのを渋っていたのもそうだが、意外と遠慮する性格なのだろうか？

「なに変に遠慮してんのよ。一人二人増えた程度で邪魔になんかならないわ。アンタはただでさえ線が細いんだから、ちょっと鍛えた方がいいわよ？」

「ムウ…」

「分からないことはお教えしますし遠慮なさらずとも大丈夫ですよ。
無理にとは言いませんが、人に教えるのは私たちにとっても復習になりますし」

「いえ、そこまで言われてしまっては断れません。私も身体を動かすのが嫌いなわけじゃありませんからね」

「そうですか♪何でも聞いてください」

「では折角なので、一からお願いしても宜しいですか？」

「任せてください！」

「では準備運動と柔軟から」

1, 2, 3, 4…

うむ。男子生徒には不真面目に行う者も多いが、氏紙さんは準備運動を真面目にやってくれている。怪我の元だから皆ちゃんとしてほしいのだが…

「氏紙さん随分身体が柔いですね。何か運動されてたんですか？」

「親が卓球でトロフィー取ってくるやつだったのでその付き合いと…サッカーとか…」

「その割に足腰弱そうね」

「効率重視で動くと筋肉って中々付きませんよね。

体重も軽いので自重トレーニングでは負荷も大したことないですし」

「まあ、そういうことにしといてあげるわ」

「次は瞑想で精神統一を行います。今回は軽めに10分にしましょう」

「正座は膝が痛くなってしまうので胡坐(あぐら)で良いですか？」

「はい。構いませんが、膝に負荷が掛からないようにする座椅子もありますよ」

「ほう。存在は知っていましたが見るのは初めてですね。へー、こんななんだ。へー」

「そういうのお好きなんですか？」

「まあ…木工やってましたからね。効率重視の銃器や、合理の結晶である刃物も好きですよ」

「なるほど」

「芽吹と気が合いそうね」

「よっこら…」

タイマーをセットして10分……

30分経過。

(なんか長くない…？気のせいかしら？)

1時間経過。

(いや、おかしい…絶対10分以上経ってる…

くっ、若葉はともかく氏紙より先に止めるわけにはいかない…！)

1時間30分経過。

()

2時間経過。

「失礼します。…瞑想中のようね」

(！ 芽吹！若葉を起こして！)

スッ…

(アンタまで始めてどうすんのよおお！？)

(ひなた！ひなたは居ないの！？誰でもいいから止めてええ！)

4時間経過。

パタ!

「む？」

「！」

「？」

「？」

「…いかん、半分寝てしまっていた」

「はあーっ…！！やっと終わったあー！」

「む……開始のボタンを押し忘れていた…」

「？一時間も経っていたのね」

「すびー…zzz」

「おや？乃木(小)さん、いつの間に」

「すみません氏紙さん、結局準備体操と瞑想だけで終わってしまって…」

「いえ、乃木さんの隣は不思議と安心できて、それが心地良すぎて眠ってしまうほどでした。なので私は満足です。こちらこそ私なんぞに付き合っていていただいて、ありがとう御座いました」

「途中で眠りこけていたとはいえ、まさか氏紙が4時間も瞑想を続けられるとはね…」

「何もしないことは割と得意です」

「私もお先祖様の隣で寝ちゃったー」

「私が来たときにはもう居たけど、園子ちゃんはいつから居たのかしら？」

以外と真面目だし、変な人だが悪い人ではなさそうだ。ああそうだ…本当は30歳以上上の大人の人なんだったな。見た目が変わらないからつい忘れてしまう。もし皆に危害を加えるような人間だったらと警戒したが…

「それってほぼ最初からやん…全く気配が無かった……。さてはニンジャだな貴様…」

「フッフッフ…秘密でござるよ」

「くっ！！ニンジャまで使うとは諜報部め…！私に自由はないのかッ…！」

「さすが乃木家…忍術なんてものまで習得させているのね…」

「園子ズの潜伏スキルを見てると一概に否定できないところが怖いわ…」

「ニンニン！でござる！」

「フフッ…」

「若葉、まさかアンタも…?!」

「え？」

「ご先祖様は忍者だったんですか!？」

「なに!?ここにも刺客が！」

「乃木家…底が知れないわ…」

「お、おい、何の話だ？」

「そうだよな…ニンジャがそう易々と正体を明かすわけがない…」

「ご先祖様が忍者…！」

「本当は精霊の力無しでも八艘飛びできるのにカモフラージュしてるのね…
忍者だと覺られないために…」

「伝説の勇者は忍ぶ者でもあったのね…」

「子々孫々に受け継がれし天狗の系譜……！そういうことだったのか…！」

「大赦の暗部がここに…」

「おい待て、違う！誤解だ！！夏凜までボケにまわるな！」

「フフッ、ごめんなさい若葉」

「よかった…分かってくれたんだな夏凜…」

「たしかに私は大赦から派遣された勇者よ。でもそれ以上に勇者部の勇者なの。
たとえ若葉が、後ろ暗い過去を背負っていても私たちは受け入れるわ…」
「いや、だから誤解…」
「仲間に対してであっても、どこに大赦の目があるか分からないから話せないのね…
これ以上の詮索は止しましょう…」
「ご先祖様…」
「乃木さん…」
「どうしてこんなことに…」

~~~~~

ピロロ

「うん？氏紙さんから？」

『今日は、ありがとう御座いました。  
お邪魔でなければ、また参加させてください』  
「はい。次こそは」

ピロロ『忍者の件も本当に嫌だったら言って下さいね。私が誤解を解いて廻りますから』

「…『ありがとう御座います。』っと」

「わーかばちゃんっ♪嬉しそうですね。何か良いことありましたか？」  
「ひなた。氏紙さんからメールが来てな」  
「フフッ……そうですか氏紙さんですか。今度私からも、お礼しておきますね」  
「ああ、マメだし意外と真面目な方だった。彼とは仲良くなれそうだ」  
「…良かったですね若葉ちゃん♪」

鷲尾須美

(あれは…新しく入部された…たしか氏紙楓さん。一人で読書でしょうか？  
何を読んでいらっしゃるのでしょうか…?)

「ひっ」

「んん？」

「おや、鷲尾さん。校外で会うとは奇遇ですね」

「こ、こんにちは…」

「はい。こんにちは。蟲はお嫌いですか？」

「はい…少し…」

「そうですか。それは少し残念です」

「氏紙さんはお好きなんですか…？」

「はい。好きですね。彼らは合理性と奇跡の塊です。そして美しくとても愛らしい。環境改編であっさり種が絶滅してしまうほど儂くもあれば、災厄の度に新たな種に分岐し、神々であろうと容易に全てを殺し尽くすことができない強かさも持っている。

鷲尾さんは彼らのどこがお嫌いですか？」

「…1匹2匹ならまだ大丈夫なのですが、いっぱい集まるとぞわぞわとして…

脚がいっぱいで在り方も私たちと違い過ぎますし、予測不能な動きも怖いですが…」

「ふむ。であれば予測可能で脚が目立たないものだったなら如何でしょう？」

「む、無理です！そもそも区別が付きません！」

「みんなゴキブリに見える？」

「はい…カブトムシとゴキブリの違いも、角の有るか無いかくらいしか分かりません…」

「そうか残念だなあ、蟲は国の宝なんだがな」

「宝ですか…？」

「そうとも。人類の想像力程度で生み出せるものなど高が知れている。蟲に限らず全ての生物は人類の先駆者であり研究者であり探究者たちだ。彼ら無くして人類の繁栄は在り得ない。

例えばそうだな…この時期ならナメクジを見る機会は多かろう？」

「ナメクジは蟲を愛好する者たちにとっても忌避することが多い蟲の一種だ。しかし、彼彼女らの粘液からは、人体に無害で体内の湿潤環境下でも使用可能な接着剤が開発されている。これも人類のみでは創造も想像もできなかった秘薬だ」

「もう少し日が進めばヒグラシが鳴き始め、クマゼミが騒々しいほど騒ぎ出す。彼らの翅の表面は極小の針が立ち並んでおり、その針は細菌を引き裂く殺菌構造体だ。薬品を使えないような場所での利用が期待されている」

「夏の害虫の代表と言えば蚊や蛆の類だな。『不衛生で、群がって纏わりついて鬱陶しい』たしかにその通りだ。だが彼らは、他の生物が利用できない様な澱んだ水にも湧いて、僅かな有機物も餌として繁殖する。それはつまり我々が利用できない腐った水を浄化し、異臭を放つ汚物を新鮮な血肉に変換してくれているということ。忌み嫌われるゴキブリたちも分解者として同じような役割を担っている。彼ら家屋害虫と呼ばれる者たちは優秀さ故に家屋に住み着くことができるのですよ」

「家の中に目を向けるとシロアリなど如何かな？小さくて可愛い見た目をしていると私は思うが、彼らは家の癌と呼ばれている。しかし彼らが居なければ樹木の強靱なセルロースの分解速度が各段に落ちる。木材を食べる蟲は他にも居るがシロアリほどではない。朽ち木にして喰うキノコたちも同様だ。彼女たちが居なければいつまでも倒木が分解されず山を埋め尽くし山の代謝が下がり老いていく。雨で流れてくる倒木など天然の破壊槌だ。だからと言って砂防ダムを乱設置すれば川に砂と養分が流れなくなり、川が痩せ、岸は崩れ、海産物は少なくなる。皆どこかで繋がっている」

「バッタは稀に作物を食い尽くす天災となるが、あれはとても美味しい。飛蝗時のやつは身は少ないし毒草食ってたりして食用にはならないが……稲草が香るワタ…まあウンコのことだが、あれが他にない美味さなんだ。蟲糞というと蛾の糞が高級な茶に成るとか聞くな？まあ鱗翅目は草汁を搾り取ってるだけで消化はしていないという話もあるが、糞繋がりではダンゴムシの糞には抗菌成分が含まれているらしい。これも人類が未知の成分だ」

「秘薬というとカブトガニだな…遙か昔からこの惑星に生きる彼らの青い血液は、医療に非常に重要な薬品と成る。未だ人工的に合成が出来ておらず数多の血を流し続けている」

「釣り餌のゴカイなんて身近なものも、その血液はヒトの血の40倍の酸素運搬能力があり、しかもそのゴカイのヘモグロビンは赤血球内に含まれているものでないため、安全基準さえ満たせば血液型を無視してヒトへ輸血が可能となる。移植臓器の体外保存期限を延ばしたり代替血液として期待されている」

「生物の内側には過去の夥しい命たちの軌跡、歴史、遺伝子が大切に綴じられている。すべての彼らは遺産であり遺跡であり、失えば二度と取り戻すことができない生遺物である。だから例え不快であっても決して殺し尽くしてはならないし、避けられることなら絶滅もさせるべきではないんだよ」

「命は歴史そのもの…」

「その通り。」

昔、西暦の頃、ヒトを殺してしまう日本住血吸虫という寄生虫が居てね…。その蟲は水辺の何処にでもいて主食が米の日本人には身近すぎた……。私たちは、その蟲を駆逐するために中間宿主となるミヤイリガイごと絶滅させてしまったんだ。

止むを得なかったとはいえ、彼らの内にも奇跡が秘められていたはずで、彼らには悪意も敵意も無く、彼らはただ彼らとして生きていただけなんだよ。それを高々数十億分の数百数十万人の命のために虐殺し、絶滅させてしまった悲しい歴史もある」

(大義があった日本住血吸虫殲滅作戦はまだマシな方で、意味もなく生息地を潰されたり毒を蒔かれたり食い尽くされたり放流という名目で遺伝的多様性を破壊されて絶滅させられた種は二桁三桁では済まないだろう…人類がバーテックスに虐殺されたからとて、己たちがさんざん小さきもの達を無関心に絶滅させ、骸を踏み砕きながら、己の番が来た途端に泣き喚いて文句を垂れるのか？ 恥ずかしいと思わないのか？ と私は考える。私は同種だからという理由で鼻唄などしない。己らがそうしてきたように無価値な虫けらとして存分に殺されればよかろう)

「でも…やっぱり怖いです…」

「怖いままでも構いませんよ。自身の感情は大切にすべきです。しかし「怖ろしいもの、忌まわしいものでも大切なものなのだ」と、ただそれだけ知っていてください。知ることで恐れを打ち減ぼせることもあるでしょう。何より、彼らは何者よりも身近な隣人なのです。怖ろしいなればこそ、知って損はありません」

「はい…貴重なお話ありがとうございます御座いました」

「あっすみません、つい長話をしてしまいました……。何か用事があったのでは…？」

「そ、そうでした！ 図書館が閉まっちゃう！」

「おう…申し訳ねえ…」

犬吠埼樹 犬吠埼風

「あふう……ううっ、むぬううう……」

「おやおや唸ったりして、どないしたんですか、ぶっちょさん」

「あー…氏紙君…おっつー……」

「おっすおっす、で？ どうしたんですか犬吠埼さん。私に話せることなら聞きますよ？」

「うーん…樹が最近ね…」

「はい」

「料理を頑張ってるの…」

「はい」

「…ええと、それで？」

「最近ハマトモなものも作れるようにはなってるの…お姉ちゃんとしては応援したいの……でも身体は悲鳴を上げてるの…！辛い！厳しい！助けて氏紙君…！」

「おう…ようは失敗料理処理要員が欲しいと

構わんですよ。噛み砕けないものと毒物以外なら食べられますから」

「ど、毒は入ってないけど…劇物ではあるかも…」

「シスコンの犬吠埼さんに、そこまで言わせるほどですか…？」

「…やっぱり、いいわ…。こんなこと巻き込めない…」

「なんですか部長、水臭いじゃあないですか。一度は同じ釜の飯を食った仲でしょう？」

「いいの…？命がけなのよ…？」

「ははっ

死ぬなら一緒に死のうじゃないですか。あなたと死ねるのなら私に悔いは無い」

「ううっ 氏紙君っ…ありがとうっ…」

~~~~~

「これは……材料を伺っても宜しいでしょうか…？」

「材料は…ごく普通の食材と調味料よ氏紙君…」

「何か発光している気がするんですが……まじで？」

「まじで…」

「まじかぁ…」

「うう…ごめんなさい…」

「まあなに毒でないなら死にはしないさ、頂きます」

「!!!?!!? ??? ? ? ? ? ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! フハッ……………妹さう、」

パッ

「氏紙君…!!! 「死なぬ……死なう…！わたしはまだ遣れる…！御前を残して逝けるものか!!!」

「いいの…！いいのよ氏紙君…！私一人でも戦えるからっ…！」

「犬吠埼…今まで気付いてやれなくてすまなかった…妹さんもずっと耐えてきたんだな…」

「氏紙さん…？」

「…案ずるな。これからは私が何度でも平らげてみせる。愛する君たちを泣かせは…しない…っ！うおおお!!!!」

「氏紙君——!!!」

~~~~

「もう…！完食してくれたのは嬉しいけど、ひどいですよ氏紙さん…！」

「アレはアレで才能だと思いますよ。常温核融合でもしてたんじゃないですか？」

「嬉しくないですっ!!!」

「まあごめんね？」

真面目に努力してる子に、おべっか被せて誤魔化すのは失礼だと思うからさ」

「…まあでも妹さんのお陰で私は楽しい食事ができました。奇怪なナニカではあったけど味も悪くはなかった。妹さんが嫌でなければまたご馳走してください」

「いいんですか…？」

「宣言通り何度でも。是非、ご一緒させてください」

「……ありがとう御座います」 ♪

伊予島杏 乃木園子

「むむむ…」

私の名前は伊予島杏。生粋のソノコストである。

私は今、園子先生の依頼で、新入部員の氏紙楓さんの一日の動向を探っています。

いつもなら園子先生自ら調査を行うのですが、生憎今日は手が離せないとのことなので私が抜擢されました。

…しかし何処へ向かっているのでしょうか？ この道を通るのは三回目です…。もしかして迷子になっているのでしょうか…？大人なのに……声を掛けてあげた方がいいでしょうか園子先生…

そういえば、先ほどから人気のない方へ進んでいますね…

たまに生け垣を覗き込んだりして凄く怪しいです…不審です…

「見つけた」

！？ まさか尾行がバレた！？

ニャー「捕獲…」

あれは……箱の中に猫が…？

「…本来なら開いて喰い殺してやるどころだが、勇者たちの手前な…

それに今回は悪質な飼い主を脅しつけた方が効果的だ。命拾いしたな御前」ニャーン

つ…ツンデレ！？いえこれはクーデレ！？…彼は良質なツンデレです園子先生！

不良が雨に打たれながら子犬を拾い上げるあの名場面みたいでドキドキします！！！！

バキッ

ああ……

奈落を写し取ったかのような瞳が……ぎょろりと私を見つめています……園子先生…

~~~~~

「まったく…こんな人気のないところまで着いて来ちゃダメでしょう…？」

「うう…ごめんなさい…」

「尾行に怒ってるんじゃないからね？伊予島さんのような空前絶後の美少女が、あんな場所に一人でいたら誘拐されて、いっそ死を望むような酷いことを行われ続ける危険だってあるんです。…まあ私なんか言わずとも伊予島さんなら分かっていることでしょうけど…私自身が不逞の輩で、尾行に気付いていないフリして誘い込んでいた可能性だってあります……勇者の力もスマホありきなんです…通信機なんて一番に取り上げられてしまいますよ…？こんな危ないことは止めてください…心配してしまいますから」

「ごめんなさい氏紙さん…」

「はい。許します。

斥候は必ず敵地から生還できるようじゃなきゃね？伊予島さん」

「はい…」

「…乃木さんともあろうものが、それに気付かないはずはない……………」

「**見ているな？**」

ヒクッ!

「カカカ……ただのハッターリだったが、見つけたぞ乃木ィ…？」

「わわわわほんの出来心だったんです、何卒、何卒命ばかりはお助けをを…！」

「ほう？命だけでよいのかね？…HDD水没の刑など如何か？勿論バックアップごとな？」

「あっ…あっ……

や…ゆるして……やめて……ごめんなさいっ…それだけは！それだけはあああああ
あ！！！！ごめんなさい`い`い`い`っ！！！！！！」

「ハアッハッハ！！いい声で鳴きよるわ！！」

「氏紙さんっ…！氏紙さんっ…！私も謝りますから！何でもしますから！園子先生の大事なメモリーを奪わないでえええっ…！」

「三度はありませんからね？」

「え？二度目までは良いの？」

「やっぱ沈めるか」

「あ`あ`あああ！！ごめんなざい冗談ですゆるじでください`やめてええ`！！！！」

「はいはい、泣くな泣くな『嘘ですよ』私も創造者の端くれだからそんなことしないよ」

「ほんとに…！？ほんとに…！？」

「命に掛けて本当です」

「目が本気でしたよ氏紙さん…」

「伊予島さんも金輪際『何でもするから許して』とか言わないでくださいね…？伊予島さんに言われたら、さすがの私も嗜虐心煽られて揺らぎますからね？マジ辞めてくださいね？死にますからね？私が社会的に」

「えっ…………あ「止めろ！！想像するな！！忘れろ！！そっから先はR指定で御座いますううう！！」ああああっ？！揺らさないで目が回りますううう！！」きゃー!!

~~~~

「それじゃあね？もし必要に迫られたとしても変身して常に臨戦態勢でね？」

「勇者の力を私物化するのは良いんですか…？」

「力は力。所詮は道具や手段の一つでしかないし、君たちの心身が侵されたり失われることの方がよっぽど大事よ。というか減るモンじゃなし、神聖だのなんだののくだらんことよ」

「わー、すごい不遜な台詞ー…」

「私が神だ。故に神である私が許す」

「神樹様の中で、なんて恐れ多い台詞を…」

「生憎、神が私に味方したことなど一度たりと無いのでね。元から信仰していないのよ」

「でも、バーテックスから守ってくださっていますよ？神樹様の恵みも生活に無くてはならないものです」

「それも神側の都合で人類を庇護したり滅ぼそうとしたりしているだけだろうよ。私の知ったことではないわ」

「…あ、そうだ乃木さん。これからこの猫を飼い主の所に持って行くんですけど、セバスチャンさんお借りして良いですか？」

「？ いいけど、なにかするの？氏紙さん」

「ちょっと飼い主さんに飼育アドバイスとか、色々お節介焼かせていただくかなと。

そのアシストをセバスチャンさんをお願いしたいのです」

「私も協力させてください氏紙さん！」

「すみません伊予島さん。

ナマモノ関係は私の得意分野なので、これはちょっと私一人で遣らせてください」

「…………そういうことなら、お任せした方がいいですね…」

「まあ…人受けは伊予島さん達のほうが抜群に良いし、飼い主さんもそのほうが嬉しいでしょうから、猫の受け渡しのところだけ協力お願いしても良いですか？」

「…はい！」

「少し長話になると思うので受け渡しが終わったら先に帰って下さい」

「いえ！最後までお付き合いしますよ！」

「私も最後まで付き合うよー！」

「うーん…」

「…ご迷惑でしたか…？」

「かなりシリアスな話もするので、ちょっと恥ずかしいと言いますか、皆さんにはまだ見せたくないですよ…なので近くの公園で待つということで納得していただけますか？」

「…尾行の罪滅ぼしにと思いましたが…」

これ以上はご迷惑になってしまいますね。分かりました」

~~~~

「こんばんは。迷子のニケちゃんを見つけたのでお連れしました」

「あっ！ニケ！うちのニケを見つけてくださってありがとうございます！御座います！」

も～、ニケったらちゃんと帰って来てよね！」

「いえいえ、外は危険がいっぱいですからね。悪いもの食べてたり病気になっていないか、一度病院に連れて行ってあげてください。行動パターンのニケさんは元野良猫ですよ。他にも中々トイレを覚えてくれないとか猫の飼育で困っていること、よく分からない癖などあればお力になりますよ？」

「ありがとうございます！でもいつものことですから大丈夫ですよ♪」

「はははそうですか。…おや？小さいお子さんがいらっしゃるんですね」

「はい！今年で四つに成ります！」

「それはそれは可愛い盛りですね。素敵です。やっぱり猫可愛がりしちゃう感じですか？いえ私もね、部活で園児達の遊び相手をよくするんですけど、子供って無邪気で好きなんですよね」

「可愛いんですけどねー。食べるって言ったから用意したのにいざ出すと要らない！って言ったり、じゃあって下げると私のアレがない！アレを返せ！って、ぎゃん泣きしたり、もう大変ですよー」

「あー、わかりますわかります。情緒優先だから言動に一貫性がないんですよー。お時間良ければ、後学のために色々質問させていただきませんか？私も幼稚園保育園での子供がどんなことをしているものなのかとかお話ししたいですし」

「あっもしかして後ろの二人って…やるねえー！色男っ！」

「いえいえ、そんなんじゃないですよ。奥さんこそ中々の美人さんで旦那は幸せ者ですね」

「旦那ももう少し育児に協力してほしいわ、ほんっと」

「あ、もう大丈夫です。勇者部さん道案内ありがとうございます！御座いました」

「分かりました」「ご武運を…！」^{パチ}

「それで

やっぱりお子さんも、お宅の猫みたく外に置き去りにしたりしちゃう感じですか？」

「え？」

「奥さん、ニケさんのこと愛しておられますか？」

「はいまあ…？」

「『脱走はいつものこと』と仰いましたが心配ではありませんか？」

車に轢き殺されたり、通行人が与えたエサで毒死したり、悪ガキのイタズラで肛門に爆竹詰められたり、水に落ちて溺死したり、野犬に咬み殺されたり、野良猫にレイプされて猫エイズ罹ったり、不審者に罾り殺されたり、寄生虫に集られて疥癬罹ったり、怪我病気で弱って動けなくなって凍死したり、カラスに空から落とされて潰れ死んだり、生きたまま蟲に肉を食われ続けて痛み苦痛に悶え確実に訪れる死の恐怖に絶望しながら死んでしまうかもしれない等と心配にはならないのでしょうか？」

「えっあの」

「放逸されていた猫が忍び込み、飼っていた大切な家族のアヒルを咬み殺されて今も嘆き悲しみ苦しんでいる女性がいます。ニケが殺害者だったとき、**あなたは責任が取れますか？**」

「専門農家などは畑に入るとき病気の侵入を防ぐため専用の靴に履き替えたりします。たまに SNS で『勝手に入るな』と注意が流れますよね。農家にとって死活問題だからです。ニケが病気を持ち込んで誰かを路頭に迷わせたとき、**あなたは責任が取れますか？**」

「マダニが媒介する SFTS ウイルスは人畜共通感染症で人を殺すことがあります。ニケが他所の庭にマダニを放って人を殺したとき、**あなたは責任が取れますか？**」

「それを聞いたあなたは、今、自分の身を案じてマダニが着いていないかニケを見ましたね？マダニを除去したとしましょう、しかし感染済みの猫に咬まれて死んだ成人女性がいます。お子さんがニケに殺されたとき、**あなたは責任を取って腹を切る覚悟がありますか？**」

ミシッ…「ひっ」

「次、外に居るのを見付けたら、皮を剥ぎ、裏返した内蔵で飾り立てた『排泄物と肉が腐って泡立ち、糸を引き異臭を放つ蛆が沸いたニケの死骸』をこの家の玄関先に吊るしますが…
あなたのせいで 殺され、遺体も弄ばれたニケに首を差し出す覚悟がありますか？」

「け、警察呼びますよ！？」

「土足で失礼ただけでしょう？あなたの猫がいつも遣ってることじゃないですか。気にしないでください。ところでこれ分かります？鉈が宙に浮いてますね？私は個人的に神樹や大赦と懇意にさせていただいておりますね。じゃじゃーんと、ちょっとした手品なんかの心得もあるんですよ。…おや？スベっちゃいましたかね？美人さんの素敵な笑顔を期待したんだけどなー残念だなー

大赦と言えば、壁の外って今どんな感じなんでしょうね？お姉さん気になりませんか？」

外来種：意図的または非意図的に、人間の活動によって生息域・移動能力圏外から持ち込まれた生物。

国内外来種：国内在来の生物が、意図的または非意図的に、人間の活動によって生息域・移動能力圏外から持ち込まれた生物。 移入先に同種が在来であったとしても、持ち込まれる移入生物の移動能力圏外であれば、移入先地域の固有遺伝子群が交雑により破壊喪失してしまうため外来種となる。

国内外来種は移入先に同種が生息していた場合の方が驚異的である（また、自然界に生息域が存在していない品種改良種や家畜種（イエネコやニシキゴイなど）、野生個体群から遺伝的に隔離繁殖された飼育生物などを第三の外来種と呼ぶ。）

侵略的外来種：侵略性が高く、生態系への不可逆的で破滅的なダメージが予見されるため、積極的な駆除が推奨される外来種。成体の飼育や運搬に法的な規制は無い。

特定外来生物：外来種が学術用語なのに対し、外来生物法により定義される法律用語である。生態系、人名、農水産業等への重大な脅威があるとして、成体の飼育、運搬、輸入、取引等に法的な規制が敷かれている。種によっては懸賞金が付けられる程度の脅威。

外来生物：海外由来の外来種。

未判定外来生物：入港の際、直ちに特定外来生物との判別が困難なものに対する一時的呼称。

補足

度々無知な差別主義者が外国人を外来種呼ばわりしたり、外来種の話で在日外国人を比喻する者たちが居るが、上記の通り『外来種とは、人間によって生息域・移動能力圏外から持ち込まれた生物の総称』であるため、完全な誤用または悪用である。そもそも人間社会の運用において、ヒトとヒト以外の生物は法的扱いが異なる。例えば、ヒトをペットのように軟禁したり扱うことは犯罪であるし、逆に、ペットを柵等の管理危惧を設置せずに野外放置することは動物愛護管理法違反の虐待であり犯罪である。

上記文章の改変を行わない限りにおいて、
この画像の無断使用及び自作発言を許可します。
@dirittok 2021/08/02

<http://b2w0who0ujigami.zatunen.com/image/02.PNG>

イエネコは、リビアヤマネコ原種の品種改良済みの愛玩用家畜種であり
日本においては侵略的外来種にあたる。

~~~~

……なんでしょう。玄関を出るとき一瞬、すごく不穏な台詞が聞こえたような……まあ、気のせいですよ？

「そういえば園子先生。どうして今回は二重尾行だったんですか？」

「氏紙さんは道なき道を進むから私一人だと見失う可能性があったんだー。それであんずんを信用してなかったわけじゃないけど、もし、あんずんが見付かっても調査続行できるようにしていたってことなんよ、あんずんクン」

「なるほど…！さすが園子先生です！」

「でも遠見できる場所が無い道に入られて見付かっちゃった…しょぼーん…」

「ごめんなさい園子先生…私のせいで…」

「ううん、私の想定も甘かったんだよ。だから次に活かして一緒に頑張ろう、あんずん」

「…はいっ園子先生…！」

「あっ、セバスチャンお帰り～」

「終わったみたいですね」

「しっかり野良猫からの完全室内飼育移行手順の指導しましたんで、もうニケさんが危険な路上で徘徊することはないと思います。去勢もして乱繁殖させないと約束もしていただきました」

「おおー！やりますな氏紙殿！」

「お仕事お疲れ様です氏紙さん！」

「いえいえ、セバスチャン氏の完璧なアシストあってのもので御座います」

「なんと…！…セバスチャン…君は…君ってやつは！！君ってやつはーっ！！」♪♪

「迷子猫の依頼多いですもんね。氏紙さんのお陰で根本的解決が進めば…少し寂しくもありますが、飼い主さんと離れ離れで不安な夜を過ごす猫ちゃんたちが居なくなりますね！」

「その通り…勇者部の猫探しはその辺が甘いと思ってね。大赦にも掛け合いたいんだけど乃木さん、伊予島さん。そのときはご助力いただけませんか？」

「勿論です！」

「お任せください！」

「ありがとう御座います。なに、後ろ髪を引かれる必要はありません。野良猫に住処を追われた沢山の可愛い小動物たちが帰ってきますから寂しくなんてなりませんよ。ご存知ですか？野良猫って一頭につき一月何百匹も小動物喰らったり殺したりしてるんですよ。彼らは腕の良い狩人なうえに、人間に差別的に擁護されているのが厄介なんですよ」

「それに、猫の安楽を考えるなら野良で居させることが如何に非情なことか、ちょっと考えてみれば分かるはずです。ペットは人の管理監督環境下で適切に飼うのが一番だと、元野良暮らし(ホームレス)の私が断言します。アニマルウェルフェア(動物福祉)の精神です」

(そういえばこの世界で生まれた命ってどうなるんだろう…？現実に身体無いから六道輪廻…？神樹様が産土神として吸収？後者の可能性が高い気がするな地祇集合体だし)

「経験者は語る…で良いんでしょうか…」

「ええんやで」

「氏紙さんも苦労してきたんだねー」

「まあね。庇護や管理下に無いからと言って自由であるとは限らないからね。

準備や力が無ければ、後ろ盾が無いことによる不自由が勝るもの。色々あったさ」

「神世紀は生活保障の制度は無くなっているんですか？」

「いえ、家庭の事情でね」

「そういえば……ご家族の方と仲が悪いんですか…？」

「『知る』ということは『知った』ことによる情報への責任が伴います。

そこは鬼門ですよ伊予島さん」

「…それでも、私たちにできることがあれば「ありませんよ」

「あなた達にできることはないし、私にもできることはありません。

彼等を消し飛ばしたのは唯一神樹に賛辞を送れる判断でしたね。家は残しておいていたできたかったのですが………すみません、また暗い話にしてみましたね」

「いえ、私の方こそ…ごめんなさい…」

「氏紙さん。大赦を動かせたとしても如何にもならないことなんだね…」

「壁外送りにしていいのなら解消はできますけどね」

「それって…」

「けふん！ そんなことは如何でもよかろう。ところで乃木さんは、毎回新入部員の素行調査なんてしてるんですか？」

「……………たまにだよー？いつもじゃないよー…？」

「そうかいそれで私は如何だったかな？特に面白くはなかったと思うけど」

「んー…基本ゆるゆるだけど局所的にがちがちー……だらしのない生真面目さんかな？」

「矛盾してませんか園子先生…？」

「いや、あってるあってる。そんな感じ。考えることはそこそこ真面目だけど、ズボラで面倒臭がりなんですよね。『可能なら死ぬまで眠っていたい』そんな感じ」

「眠り続けるのも中々大変なんよー」

「それ。めっちゃ疲れる」

「半日くらいなら大丈夫なんだけどねー」

「20 時間以上となると絶食も伴って全身怠くなる」  
「全身凝っちゃうー」  
「寝てる時無意識に寝返り打てなくて余計にねえ。夏は脱水症状でぐったり」  
「休み休みじゃないと頭痛がつらーい」  
「頭痛は『賢者のプロペラ』リピートする」  
「音楽ー？」  
「どういう原理か分からんけど、ピコピコ音が頭痛に効くのよね。ある程度」  
「私も今度聴いてみよーっと」  
「読書好きの伊予島さんは音楽などは如何ですか？」  
「…私は恋愛系のバラードが好きです。男の人はやっぱりそういうのは聴きませんか？」

バラードっていうと、授業でやった怪獣のバラードが頭に浮かぶよね。  
おっおっきーな怪獣が さーばーくーに住ーんでいた

「ぶっちゃけバラードとかロックとかテクノとか種類はよく分からんのですが、恋愛系だと、ドリカムの『うれしい！たのしい！大好き！』とか、黒木渚の『金魚姫』とか、奥井亜紀の『愛はかける』とか好きですね」

「名曲ですよね！」  
「『愛はかける』なんかは伊予島さんドストライクだと思いますね。  
ちょっと変化球で倉橋ヨエコの『線を書く』とか『輪舞曲』とかも好き」  
「聴いてみます！！」  
「～♪～♪」  
「乃木さん、歩きながらイヤホンは危ないですよ」  
「えへへー、気に成っちゃってー♪」  
「どっか座りましょうか」  
「あっ！じゃあ私のオススメも聴いてほしいです！」  
「おう。時間もあれだからあんまり長くはできないけど、それは楽しみね」

~~~~~

氏紙さんのお勧めラブソングは、どれも素敵でした…

ストレートに胸がきゅんきゅんするものから、ちょっと切ないものまで網羅されていました。…氏紙さんはたまに怖いときもありますけど、きっと良い人です。

上里ひなた 郡千景

ガチッ、ガチガチ...

ガリッ...

プシュン...

テテン...

パキ...

何でしょうこの空間...千景さんも氏紙さんも、かれこれ小一時間、一言も発していません...いえ、私が来る前からいらしていたようなのもっと経っているかも...お互いに自分のことに没頭しているだけなら良いのですが...もしかして喧嘩していたりしないでしょうか...？息が詰まります...

若葉ちゃんは真面目で悪い人ではなかったと仰っていましたが.....
そうです、話しかけてみましょう。

「氏紙さん、この前は若葉ちゃんがお世話になりました」

「...ん？何のことでしょう？」

あら...？

「武道場で4時間も若葉ちゃんの瞑想に付き合っていたいただいたそうじゃないですか」

「ああ...別に、世話をされていたのは私の方ですから気にしないでください」

「私たち巫女も瞑想や行を行います、慣れない方には中々大変なことだったのでは？」

「...ホームレスしていた頃、夜に公園で寝ていると通報されて職質されて寝られなかった
ので、座位のまま仮眠をとる技能を獲得しています。なので特に苦労はありませんでしたよ」

「そうですか...（悪いことを聞いてしまいました...）」

「お二人は、何かお話しされたりはしないのでしょうか...？」

「別に...」

「作業の邪魔をする気はないので」

「私...お邪魔してしまいましたか...？」

かみ「.....上里さん」

「はい...」

「気を遣わせてしまったようで、すみません。けれどこれがボッチ本来の距離感であって、
機嫌が悪いわけでも特に仲が悪いわけでもなく、私たちは極力お互いの領域に干渉な
だけなんです」

「...そうね。氏紙さんは土居さんの様にパーソナルスペースには入って来ないし、不必要に
話しかけてもこないから、近くに居ても落ち着いてゲームができるわ」

「では、喧嘩されていたりなどは…」 「「ない {です／わ}」」

「…そうですか♪」

心配してしまいましたが、お二人はすでに言葉が要らない仲だったんですね」

ガンッ！！ ユールオオツス…！

痛ッアア…

「ちょっと上里さん！変なこと言わないで！！」

「あら…？そういうことではないのですか？」

「んー…まあ、間違っていないのか」

「あなたも否定しなさい！」

「いやあ、でも、過剰反応して否定するのもそれはそれでさー？」

「クッ…」

「千景さんが友奈さん一筋なのは分かっていますから、大丈夫ですよ…？」

「もっとユルく生きようぜ」

「……はあ…分かったわよ。高嶋さんの前では止めてよね…」

「しかし、氏紙さんにお友達が居なかったというのは本当なのでしょうか？若葉ちゃんも良い人だと仰っていましたし、気遣い上手なお優しい方だと私も思いますけど」

「はっは。ありがとう御座います。でも気のせいですよ」

「この人、これで結構卑屈で根暗なのよ上里さん」

「そんな風には見えませんが…」

「いえ、事実ですよ上里さん。私は郡さん並みかそれ以上に内向的です」

「あなたの自虐に私を巻き込まないでくれない？」

「知らんのか？人は良くも悪くも遣り返す生き物なのだよ」

「私は客観的な事実を述べただけでしょう？」

「私も事実を述べただけだが？まさか自覚が無いとでも？」

「お黙り」

「だが断る」

「あの…喧嘩は…」

「「喧嘩じゃない {ですよ／わよ}」」

「…お二人はいつもこんなやり取りを？」

「基本不干涉なので会話はありませんがね」

「いつかの、あなたの長文メールは本当に鬱陶しかったわ」

「さーせんw」

「刈るわよ」

お二人とも齒に衣着せぬ物言いですね…

息もぴったりで、とても仲良しさんに見えるのですが千景さん…

「上里さん…まさかまた変な想像してないでしょうね…」

「えっ！？いえ、そんなことはありませんよ…！」

「まあ、いろいろ考えてしまうのも仕方ないのでは？勇者部は善人の集まりだから、ここまで郡さんが無遠慮に悪態吐ける相手なんてそう居ないでしょう？私にとっての郡さんも似たようなものです」

「…そうね……でも園子さん達に無いこと無いこと噂されたら堪らないわ…」

「私は構いませんがね。犬吠埼さんと違って郡さんは錯乱しないでしょうし」

「勘弁してほしい…」

「…いつの間にか、私より千景さんと仲良くなっていらしたみたいで…

お友達（千景さん）を取られてしまったみたいで少し焼けちゃいますね…」

「上里さん…？」

「心配いりませんよ。私と郡さんの仲は特殊枠で、ここから一步も進展することはありませんが、あなた方はそうではない。……上里さんも、少し気を張りすぎなのではありませんか？ちょっとした不和の芽も恐れているような……他にも…

…少し、荷下ろししませんか？」

「…いえ、ご心配いただき、ありがとう御座います。

でも、特に深刻なことはありませんから大丈夫ですよ♪」

「如何ですか？千景殿」

「馴れ馴れしく下の名前を呼ばないで氏氏……

上里さん。明るく振舞ったつものようだけど何か悩んでいるのがバレバレよ？」

「とりあえずまあ、こちらへお座んなさい」

「……はい」

「私も高校では手持無沙汰になると部員にマッサージして廻るなど、しておりましたんでね？多少得意にしておるのですよ」

「えっ、あの、はうっ！」

「氏紙さんあなた……セクハラはしないのではなかったの…？」

「…高校の美術部もほぼ女子だったのでこれくらいは大丈夫かなと……ダメでしたかね？嫌でしたら遠慮なく言って下さい。止めますし謝りますから」

「い、いえ、ちょっとびっくりしただけですから大丈夫です」

「では、ちょっと失礼しますよい」

これは…友奈さん達とは違いますけど……んんっ…

氏紙さんが身体の重さを支えてくれているので全身の力が抜けて……

頭も首も肩も背筋も腰までしっかりと、でも痛くないように優しく解かれて……腕や掌も……血行が促進されて全身が温まっていますね……。身を預けている感覚と、温かさと…優しく包み込まれているようで、とても安心します……

「きゃあ!？」

「あ、やっぱり鎖骨のそこ駄目なんですね。女性しかそうならないので、たぶん女体由縁で私にゃ良く分かんのですけど解しときますか？」

「い、いえ！結構です！大丈夫です！！」

「最低ね…」

「えっ……なんなの？」

～～～

「よいしょとまあ、こんなもんですかね」

「ありがとう御座いました。全身が少し軽くなった気がします」

「いえいえ」

「身体も温まって、いろいろ解れたところで本題に入りましょう」

「やっぱり話さなきゃダメでしょうか…」

「ダメじゃあないですけど、話せることなら放してしまってほしいですね」

「乃木さんに相談できない悩みなんて、どうせ相手に気を遣ってしまうようなことなんでしょう？私たちにそんな気遣いは無用よ」

「せやせや、私なんか今はこんな成りしてますけど四十過ぎのジジイですからね？」

「……………その……」

私ってそんなに怖いんでしょうか…？」

「…？」「気にしていたのね……」

「私は『可愛いなあ』とか『めんこいなあ』とは思いますが…ああでも美人の無表情はキリキリしてて怖いとかは言いますね」

「そういう話ではないわよ……」

上里さんは、お人好しの勇者たちを引き締める役割を買って出ているものね…

弁も大人顔負けに立つから多少は仕方ないと思うわ」

「最近それに拍車がかかっているみたいで、大赦に顔を出したときでさえ少し距離を取られてしまうんです…打算的にそれを利用して大人の人に意見を通すことさえあります…」

「なので自業自得でもありますし、皆さんのお役に立つためには必要なことだとも理解しているんですが……たまにチクチクと…私も皆さんと変わらないのにと胸が痛むんです…」

「まあねえ…監督役というのは煙たがられるものですからね」

「氏紙さんもそのような立場になられたことがあるんですか…？」

「若い頃は、あるネトゲの古参として独裁者呼ばわりされるくらい威圧的に振舞っていたこともありますね」

「老害プレイヤーだったのね」

「…自分の裁定が誰よりも公平で正しいと驕ってましたからね…今は反省してます………反省してはいますが今もそう変わりませんけどね……」

「今は上里さんのお悩み相談をしているのだから止めてくださる？」

「千景さんそれは、いくらなんでも…」

「いえ、これで良いんですよ上里さん。

斬るときはキッチリ切ってくれてちょっと嬉しいくらいです」

「マゾなの…？」

「容赦のない本音が却って心地良し………でもちょっとだけ胸に痛い…」

「変態は放っておきましょう…」

それで上里さんは誰に対して『これ以上怖がられたくない』と感じているの？」

「それは…」

「それは……」

「言えませんか…？ 言いづらいですか…？ 覚悟が揺らいでしまいますか」

「私は皆さんの様に戦えません…ですからせめて、皆さんの心の支えになれるよう努力してきたつもりです……戦う助けには成れなくとも心は守ろうと……」

「でも？」

「怖がられ続けて、もし皆さんとの間に壁が出来てしまったら、大事なときに寄り添えなくなってしまうのではないかと……いえ…このまま疎外感が膨らみ続けてしまえば、いずれ自身のことで手一杯になってしまう気がしてならないんです…」

「孤高の王様の癖ですね。強く在ろうと挫けず、誰よりも前に立ち、進み続けたために周りを置き去りにしてしまう。そのことに孤独を感じても、示す立場故に己を律し、弱さを見せられない……」

なるほど上里さん、予言します。『あなたの悩みは近く解決するでしょう』

「詐欺ね。予言も何も今この場で解決させるんじゃない…上里さん？」

「はい…」

「あなたの悩みは『疎外感』。その内約は

- ・ 仲間のために努力して得たのに、その力が仲間からも恐れられてしまうこと
- ・ 恐れられる故に、畏れ(リスク)を負って得た力が無駄になってしまうのではということ
- ・ その悩みを誰にも打ち明けることができなかったこと

私たちの力になろうとするあまり、自縄自縛(じじょうじばく)に成りかけているのね……

大丈夫よ上里さん。貴女は十分、私たちの助けになっているし支えてくれている。それにもう私たちが貴女を独りにはさせないわ。それで解決よ」

「…ありがとう御座います…千景さん……」

「…つまらないことで悩んでいたわね…気を張りすぎよ」

「『悩んだら相談』ってもまあ、シメなきゃいけない相手に話して威厳を失うわけにもいかなかった。けれど郡さんは自分で律しているし、私にはそもそも怖がらせるのが無理だったと……子供の内にちゃんと子供やっとなないと成人してから悲惨なんだぜ？」

「あなたも何か悩んでいることがあるんじゃない？ついでに聞いてあげても良いわよ？」

「……………郡さん…あなたは本当にお優しい方ですね…」

「そういうの要らないから話しなさいよ」

「……心頭滅却の精神で努力はしているのですが…ええ、九分九厘抑えられてはいるのですが、それでも不意を突かれて中学生相手に勃たせてしまうことがあって……いつかバレて傷付けてしまうのではないかと悩んでいます…」

「立たせ？……………たっ…？！！死になさいっ！！！！」アッ!

「…氏紙さんも男の方ですからね……仕方ありません……………」

間違いが起こる前に処置してしましましょう」

「ふ……ブルッと来たぜ……………逃げるッ！」

「待ちなさい変質者！！」

ハハ、ツカマエテゴ ランナサイ！ ヒソウナクセニ、ヤケニハイワネ!

タンキョリナラ リクジ ヨウブ ニダ ッテ ヘイソウデ キルゼ

…

「九分九厘もコントロールできていることが『悩み』ですか……………氏紙さん…」

山伏シズク 山伏しずく 加賀城雀

「てんめええええ！うじしいいい！！またしずくを怖がらせやがったなあ？！！」

「フン…出たな、もう一人の山伏しずく…」

「おうおう…俺がお目当てかい、いい度胸してんなあ？！おいゴルァ！！」

「ひいい…！まずいって氏紙さん、シズクまじおこだよおお！！」

「良いぜ……来いよ山伏…何度でも御前の愛を受け止めゴプルォアッ？！！」

「うじしさーん！？！！」

「意味分かんねーこと言ってんじゃねえぞテメエ！！」

「………今のは不意を付かれてしまっただけだ…次はこうはいかんぞ山伏ィ…」

「こいつ、笑ってやがる………気持ち悪ィな…」

「うおおお！！やまぶしいいい！ああいしてルポオオオッフゥ！！」

「うじしさああん！！シズクももう止めてよ！氏紙さんは怪我人なんだよ！？」

「『元』怪我人だろうが…（…手応えが妙に軽かった……）」

「ククッ…気付いたようだな山伏い……」

「てめえ…流しやがったな…」

「ご名答……」

なあ山伏……私は弱いよな…。御前に比べたらチリ紙や蚊トンボ並みの貧弱者だし、バーテックスに対して加賀城がやるように受けることも躲すことも私には難しい。だがなあ山伏………弱さ軽さも極まれば御前の拳を受け入れられる軽業になるんだぜ？」

「チッ、やるじゃねえか……ちっとばかり見直したぜ…」

「惚れてくれても良いんだぜ？」

「ハッ！寝言は寝て言いやがれ！…ラァァァァァ！！」

「よく見てろ加賀城！これが弱者の力だァァァァァ！！！」

~~~~~

「グフゥ…」

「氏紙さん無茶しすぎだよお…！いま冷やすものもってくるからね？！」

「ったく…叫んで飛び掛かってくるだけで拳も握りやがらねえ。何がしたかったんだ御前」

「身体を動かしてスッキリしたシズクさんは本当に素敵な表情(かお)をしますからね……  
そんな美しい貴女に逢うためなら何発だって引き受けましょう…」

「はっ?!はあ!!?なに言ってやがんだテメエ!!?」

「照れて紅潮したシズクさんはとても艶やかで、愛らしくて、誰もが魅了されずには「うあ  
ああああ!!!//」ブッ!？」

「……シズク………私も恥ずかしいのに…」

「…たまには山伏さんも一発どうですパイソツ!!!」

「しないっ…!」//

乃木園子 結城友奈 東郷三森 三ノ輪銀 鷺尾須美 乃木園子

「楓さん楓さん」

「何でしょうか乃木さん」

「どうして私たちから距離を置くのかな楓さん」

「あなたが私の服をひん剥いて女性下着を履かせようとしているからですよ乃木さん」

「別に良いじゃない楓さん。減るもんじゃなし」

「女装に抵抗は無いけれど。美少女に羽交い絞めに脱がされるのはメッチャ恥ずかしいわよ乃木さん」

「でも楓さんブラの着け方とか分からないでしょー？」

「そんなの構造を把握すれば、そのうち覚えるわ」

「ダメだよ！ちゃんと着けないと形が崩れちゃうもん！」

「ていうか結城さんまでなんで居るの、君の恥じらいは何処に行ってしまったの」

「私が呼びました」

「なんでなのん東郷さん…」

「フッフ♪」

(友奈ちゃんの可愛いドレス写真が増えたわ♪誘ってくれて、ありがとうそのっち♪)」

「うーん、それじゃあ下着は後にして浴衣着せちゃおうか、ゆーゆ！」

「あー、それノーパンで着ろって流れだろ知ってる是が非でも脱がす気だなおいィ…」

「勇者はー？」

「諦めないっ！」

「成せば大抵なんとかなる！」

「誰だ五箇条なんて考えたやつ！」

「風先輩です」

「犬吠埼さあああん！」

「さあ、もう観念するのだよ…」「逃げられませんよ楓さん」「フッフッフ…」  
がチャ「東郷さーん！須美が鼻血の出しすぎで倒れましたー！」

「……………近寄るな貴様らあ！この娘がどうなってもいいのか！！」

「ええっアタシ人質！？」

「そんな！？銀ちゃんが…！」

「銀は…！銀は関係ないじゃないっ！」

「ミノさんを解放して…！」

「フハハハ！全員そこから動くんじゃないぞ？

さもないと、この娘にあんなことそんなことして私が社会的に死んじゃうからな！！」

「…アタシのことは気にすんな……須美…園子」

「そんなのできないよミノさん…！」

「ダメよ！銀が犠牲になるなんて私耐えられない！！」

「友奈さん… お願い……………聞いてもらえますか？」

「銀ちゃん…？」

「…須美はたまに暴走するし、園子もちょっとよく分かんないところだと思います……

でも須美は性格もありますけど、皆が好きすぎて小さいこともマジになっちゃうだけだし、園子は園子で、ぼやっとしてるけど皆のこと良く見てて、自分のこと二の次にコソソリ助けようとするやつなんすよ……………とにかく二人ともメッチャ良いやつなんです…！」

「二人とも結構心配なところあるけど、友奈さんになら安心して託せます。

だから……だからっアタシの大好きな二人の親友を！……………宜しくお願ひしますっ！！」

「…どうして銀ちゃん…！諦めちゃだめだよ…！」

「銀っ…！」「ミノさんっ…！」

「フッ…良い辞世の句だったぞ、勇者三ノ輪銀。褒めてやろう」

「ハハッ！ありがとう御座います！……でも辞世の句なんかじゃあないッスよ！」

「ほう？魔王から逃げられるとでも思っているのか？ 愚かな」

「いや、勇者は逃げない。

こんなごっこ遊びに付き合っていないで、逃げるべきはアンタの方だったんだ。魔王」

「…気でも触れたか？」

「何故なら……………」

「捕まったのは御前の方だからだ魔王！！」ギョ  
「なにっ?!」

「須美ちゃん！！園子ちゃん！！」  
「悪の在るところ国防仮面あり！ 神妙にきなさい！！」  
「今です園子先輩！」  
「わっしー！ゆーゆ！行っくよーっ！！」  
「放せえええええ！！！！ワタシに近寄るなアアアアア！！！！！！」

~~~~~

「くっ…////」
「「かわいいー♪」」
「おのれ…//」
「良く考えたら義体なんですし、別に見られても問題なかったのでは？」
「……東郷さん想像してみてください……」

鼻が擦れるか擦れないかの至近距離で、結城さんが真剣な面持ちであなたの瞳をジッ…
…と見つめています。何十秒見つめ返していただけますか？何秒平静を保てますか？『（そん
なに真剣に見つめてどうしたのかしら友奈ちゃんっ…//）』と貴女がそわそわしだした頃、
結城さんがニコリと慈愛の微笑みを見せたかと思うとスッ…と耳元に唇を寄せて『美森…
…美森…』と脳を優しく侵すように甘く名前を囁き続けてきます…口が開く度に聴こえる
水音も掛かる熱い吐息も辛抱たまらんですね？でも何故か抱いてはくれません。そうです、
貴女がいつ我慢できなくなり自分を押し倒し、欲望のまま情欲のままに身を委ね乱れてし
まうだろうか。貴女の白雪を想わせる清らかで滑らかな見る者の呼吸を止める美しい肢体
に熱が宿り、自分を求め上気して湿り気を纏った肌を重ね擦り合う至福のひとつときに心身
を墮としてくれるのだろうか？と反応を愉しんでいるのです。コンマ何秒耐えられますか？」

「はあっ…//はあっ…////あゝあゝあゝ！友奈ちゃんが…友奈ちゃんがっ……！////////」
「ゆゆゆゆゆゆ友奈さん破廉恥ですっ！！！！////////」
「えええっ！？////////」
「わぁー…//」
「…////」
「…楓さんも私たちにお着換えさせられてるとき、そんな感じだったってことかなー？」//
「[[[[！！////////！！]]]]」
「それはむしろアタシらが恥ずかしくなるやつじゃん…////////」

「いや違うが？」

「ちがうんかーい！！////」 ふおっ！？」

「友奈さんの貴重なツッコミシーン！！」

「ええー？違うのー？」

「『大好きな人を傍に感じるだけでドキドキしますよね』って比喻よ」

「伝えたいことは凄く乙女なのにカエデさんの例えが過激すぎる…！！」

「とっても官能的でしたー…」 //

「いや君らも異性だったやつの身包み剥ぐとか中々過激なことやってるからね？」

「私…恥ずかしいです…////」

「恥じらいを忘れない君のままでいて」

「……（友奈ちゃんに色目遣ったら…分かってますね楓さん？）」

「東郷さん鼻血で顔面真っ赤だし目とか色々怖いですがこっち見ないでください」

「はっ！？東郷さん鼻血！！」

「大丈夫よ友奈ちゃん♪顔を洗いたいのだけど、お風呂借りていいかしら？そのっち」

「じゃあ、そのっちもゆーゆと一緒に付き添いお願いねー？」

「！…はい。了解です、園子先輩ー」 ♪

「場所なら覚えてるわよそのっち？」

「着替えとかも用意しなきゃいけないからねー

お客さん用の場所は変わってないから宜しくそのっち♪」 b

「お任せください園子先輩♪」 b

「分かったわ。じゃあ、宜しくね園子ちゃん」「あいさー！」 ♪

「……さて、

ゆーゆとわっしーの蜜月のお風呂タァ…イム…の記録はそのうちに任せて、次のお洋服行こうか楓ちゃん……」

「まだ続けるんですか！？///」

「……やはり書く側の耐性までは崩し切れなかったか…」

「フッフッフ…却ってお腹が空いてしまいましたぞお…？」

「……………いいよ……………シて……………」

…大丈夫だよ？わたし怖くないよ？……………あなたのこと……………信じてるから…」

「くっふうー…！信用を裏切りたくないという好意や善意に語り掛ける定番きましたなあーっ！！だがっ…それは相手の衝動も同時に駆り立てる諸刃の剣！『だがっ…！だがっ…！』っというその葛藤が！胸の痛みが愛おしい！！私はいま！試されているーッ！！！」

「理知的な貴女だからこそ、これは効果的でしょう？」

「負けないっ…！私はっ…負けないっ…！！」

「自身の衝動に対してなのか、私の心理攻撃に対してなのか分かんねーなこれ」

「園子さんと楓さんの間で謎の攻防が行われている……」

…解説のワー・シオスミさん、如何でしょうか？」

「分からないっ、分からないわワーギンさんっ…///」

「駄目だ……須美がまだ直ってない…」

「まあ揺さぶりのつもりではあったけど…」

本当にアンタになら、私の初めてをくれてやってもいいと思ってるんだぜ？ 乃木園子」

「ふぎゃん?! 助けてミノさーん! 楓さんにすけこまされるーっ！」

「ええっ?! 園子さんがダメならアタシだって無理ですよ?!」

「ふむ……実は攻められ慣れていないから論理武装を抜ければ柔らかいと……結構少女趣味で男らしさ演出にもちょっと弱い…押してダメでも引き摺り倒せばいける…？」

土居球子 三ノ輪銀 古波蔵棗 伊予島杏

「「キャンプっ♪キャンプっ♪キャ～ン～プ～♪」

いつもは、あんずに『子供だけで泊まりキャンプなんて危ないよ。タマっち先輩だって女の子なんだからね?』なんて止められるが今日は違う!一応中身は大人のカエデがいるからな!話じゃカエデは、よく虫取りに行って山で野宿してたらしいし夜が楽しみだ…!

まあ杏の言うことも分かる…タマだって、タマが知らないところで杏が一人で夜を明かすなんて言い出したら絶対止める。止められなくても着いていく!!…はっ!?まさか杏のやつ何処かに隠れてるんじゃないか……いや、それなら一緒に来てるから無いな。さすがにな。

「楓。暑いのは良くないと言っていたが大丈夫なのか?」

「早朝出発、冷媒全開で日傘もあるので、まあなんとかなるでしょう。死ななきゃ掠り傷です。ご心配、ありがとう御座います古波蔵さん」

「そうしてるとホントに女子に見えるよなー。日傘で」

「土居さんだって、私の目には可愛らしい女の子として映っていますよ?」

「バッカ!『可愛らしい』とか言うの止めろよなー!?背中がぞわってするだろ!」

「球子はシーサーに似ている…」

「棗はいい加減、タマにシーサーを見るのは止めろお!」

「でも、毎年の球子さんの水着が可愛って結構評判ですよ」

「うおい銀!?御前もタマをいじるのかー!?!」

「えかったねえ♪愛されキャラやんねえタマちゃん♪」

「うぎゃあああ!ヤーメーローよおおお!!」

穏やかな微笑みで優しくタマの頭を撫でる一なーよおおお!!!」

「あーっ、いいなー球子さんだけー」「いくない!!」

「銀の頭は私が撫でる……ペロや…」

「はいっ棗さん♪」

~~~~~

「よーっし!テント張るぞー!」

「やー実は山でテント張るのは初めてなのよね」

「そうなんですか?」

「そうなんよ。私は着るテント使ってたんだけど、夏は暑いから着ずに置いてくし、冬は暖房無い部屋の防寒に張って引き籠ってたし、山でホームレスは一々下山するの面倒くさいしでね」

「ということは、野宿はいつも着の身着のままだったのか」

「そうですね。白の長袖長ズボンに蟲入れ用レジ袋数枚と水筒と剣鉞に通信機、それにヘッ

ドライとハンドライトが基本装備でしたね」

「虫カゴと網は使わないのか？」

「道具を積めば幾らでも追い込めますが、私が狙うのはムカデとかゴキブリとか這い寄るものですからね。藪を切り開いたり土を掘ったり朽ち木を採取したりに剣鉈一本、捕獲には素手とレジ袋。それくらいのハンデで丁度良いのよ」

「ご、ゴキブリすか」

「おや？三ノ輪さんはゴキ駄目だったかな？夜山採集では、だいたい逢える子たちだけど」

「ダメじゃないですけど……敢えて捕まえようとは思いませんね…」

「タマも山に居る奴とか平気だけど、別に好きってわけじゃないな」

「四国のゴキブリは小さいが……だからと言って好きでもないな…」

「勇者部のボーイッシュ担当も駄目だったか……さみしいぜ…」

「意外と園子が虫好きだったりしますよ」

「まじか。意外なとこ来たな」

「他に好きな虫はいないのか？」

「他っても、私が好きなのは害虫扱いされてるやつらばかりだからなあ……」

あ、ハチなんてどうですか？可愛いの代表格ですよ」

「ああ！ミツバチとか可愛いですよね！」

「んむ。ハチの可愛さならタマにも分かるぞ」

「だが、ハチを取るの危険ではないか…？」

「オオスズメバチとかなら眼鏡ケース使って一匹持って帰ったりしますが、基本はその場で見て愛でるものですね」

「…いやオオスズメバチを持って帰るのはちょっと……」

「カッコいいから気持ちは分からなくてもないが…」

「危険だ…」

「くっ…！文化が違う…！」

「バーテックスにも虫っぽい奴いるから、そのうち捕りに行きそうだなカエデは」

「アハハ！球子さんさすがにそれは！……無いですよカエデさん…？」

「バーテックス相手じゃあ、ちと装備が心許無いな。容れ物もないし」

「装備と容れ物があれば捕るのか…」

「どこまで切り落したら霧散するのかなとか、生きたまま解剖したりしなきゃですからね」

「カエデの闇を見たぞ…」

「あによー自分たちは日常的に殴ったり燃やしたり刻んだりしてるくせに一ぷんぷんっ☆  
……そうだわ！うふふ♪大赦さんに頼んでバーテックス用の虫ピン造らせようかしらっ♪」

「ういえっ…！？ 別の意味でも悪寒を立たせるなあ！！」  
「可愛いく怖いこと言っても余計怖くなるだけですってカエデさん！」  
「名前はガングニールとか天逆の鋒とかにしようぜ」  
「強そうな名前だ…」  
「量産消耗品なのにな。でも、そこがいい」  
「ロンギヌスってキリスト磔にした鎗だろー…？名前はカッコいいけど発想が怖いぞ…」  
「標本制作中の沢山の針で磔にされた蟲とか素敵じゃん？」  
「分からん…」  
「…カエデさんって、実はスプラッタなのとか好きですか…？」  
「特別好きでも嫌いでもないけど BLOOD-C ってアニメは楽しかったな」  
「うわぁ……何か分かんないけど名前からもう血まみれだー…」  
「夏だし今度勇者部でホラー鑑賞会とかしてみる？」  
「それは…風が泣いてしまう…」  
「犬吠埼さんって結構色々脆いすね……男に免疫無いというか総へタレ受けだし、怖い駄目だしめっちゃ乙女……女子力(乙女)…」  
「おまえら針に血の話とか止めろお！注射のこと思い出しちゃうだろー?!」  
「あああああ?!なんで言っちゃうんすか!なんで言っちゃうんすか球子さん!アタシも思い出しちゃったじゃないですかああ!!」

「なに?二人は注射駄目なの？」  
「楓はやはり平気か？」  
「針が体内に這入っていく感覚とかむしろ好きですね。ついニヤケそうになるのを、いつも我慢してます」  
「はあ!?注射が好きとか頭おかしいんじゃないのかカエデ?!」  
「おおうド直球だな」  
「カエデさん怖い!カエデさんが怖い!!」

「さて、テント張り終わったし寝るかー」  
「うおい!!もう何処からツッコめばいいか分からんぞ!？」  
「あ、そういえばテント一つだけしか持って来てなかったのか。嫁入り前の君たちと床を一つにするわけにはいかんよな。いやそもそも義体は寝れねーんだったわ。はっは。こいつあ、うっかり「八兵衛かっ!…じゃないんだってばああああ!まずは川遊びだろおおお!!!?」  
「いつもはボケ担当の球子さんがツッコミにまわらざるを得ないほどのボケの連発…」  
「すごいな…楓は…」

~~~~~

「カエデさんが川に浮いてる…」

「水死体の様に…」

バシ!

「止めろよもう!! 水に浸けちゃダメなやつだったのかなーとか色々考えちゃうだろ!? 心配するだろお!？」

「いやー、水に入ったら必ず一回は水死体ごっこするもんじゃん？」

「やめろよお…! あ……もうなんか涙出てきちゃったぞ…!」

「ごめんねー? よしよーし」

「ばっきやろう!! よしよしするな!」

「いやもう、クソかわやんタマちゃん。どうする結婚する？」

「すーるーかあああああああ!!!!!!」

「ははははは」

「おい銀! 棗…! タマにばかりツッコませてないで助けてくれえ…! もうタマは限界だあつ…グス」

「球子は…すごいな…」

「尊敬してます球子さん…」

「うあああああつ! 見捨てるなよおおお…!!」

「ごめんごめん、土居さんがあんまり可愛いから遊んでみたくなっちゃったんだ。もうこれ以上は、からかわないから泣き止んで。ね？」

「タマは…今日カエデと遊ぶの楽しみにしてたんだぞ…?なのに…っひどいじゃないか…」

「グッ…! (無いはずの胸が痛い…! 今直ぐ抱き締めて撫でてやりたい! ……が…

この冷たい身体ではな……………なら…)」

「ごめんなさい球子さん…私も大好きな球子さんとおふざけが楽しくて楽しくて、嬉しくてはしゃいでしまっているんです。許していただけませんか…?」

「……ゆるすっ…許すけどっ…もう心配させるのは無しだからな…っ」

「球子さんっカエデさん!」

「うわっ、銀! 棗!？」

「ごめんなさい球子さん! アタシたちも混ぜてください!」

「お、おおい…なんだお前等いつの間にタマの後ろを取ったんだ…?」

「球子。海とは少し勝手が違うが、川の事故も私が防いでみせる。だから大丈夫だ」

「いや…タマが心配してるのは、そういうことじゃなくてだな…」

「どころで皆さん朝早かったですし、そろそろ小腹が空いてくるころではありませんか？
真面目に弁当作るのは面倒臭かったのが在りませんが、軽食に御結びとサンドイッチと適
当に焼いたものを詰めてきました」

「マジっすかカエデさん！」

「女子だ…！ホントに中身はカエデなのか…?!」

「私も楽しみにしていましたでしょう？私はバレンタインでケーキを焼けども、
渡せずに独りで食べてしまう割と尽くすタイプなのです」

「…？それ自分で食べちゃったら尽くせてないじゃ…？」

「せやな。作ろうとは思うけど、だいたい毎年バレンタイン過ぎてから『あ、また日付忘れ
てたわ』って気付く阿保なのです」

「まさかのドジっ子属性?!」

「そんな褒めんよ。照れる」

「もしかしてタマ達より女子力高いんじゃないか…？」

「私はバッタの踊り食いとかするけど、タマっちさんはそれ以下で良いの…？」

「げえっ！？さすがにバッタの踊り食い以下は嫌だ…!!」

「野性味と女子力を兼ね備えている……あ、サンドイッチ普通に美味しい…」

「楓は作っても食べられないのか…」

「さっき眠ることもできないって言ってたなカエデ…」

「勇者部は毎年バレンタインイベントあるのに……そういえば歓迎会でも…カエデさん…」

「おうおう、わんぱくガールたち、しょんぼりしてるんじゃないよ。私に残された欲求を
満たせる器官は精神と記憶領域だけなんだ。だから哀れむんなら幸せに笑顔でいてくれ。

……そうとも。あなた方が幸せであることが私の幸せです。

だから子供(ゆうしゃ)さん方。どうか私のために幸せに生きて幸せに死んでください。

私は私が大好きなので」

「…ばかやろお…っそんなっ、そんなこと言われて…っ、泣かないわけないだろ…っ…!!」

「カエデさんっ…！」

「…ずっとそんなことを考えていたのか……」

「アタシっ…絶対幸せになって、絶対カエデさんも幸せにしてみせます…！」

「照れますやん」

「タマだって…！タマだって、幸せになってやるからなっ…！」

「…約束する」

「…なんかもう恥ずかしくなってきたから、この話終わりたいんだけど……………
よろしう…」

ろ…！」

「「任せ タマえ…！」

てください…！」

～～～

「なーあー、カーエーデー、遊ぼうー？」

「そうですよー、さっきから川に漬かったまま微動だにしないじゃないですかー」

「夏の日中は暑いので私は涼んどります」

「では潜水して私と川魚を眺めないか？」

「そいつあ素敵ですね」

「だろう？」

「ぐぬぬ棗のやつ、海でもないのに…」

「まあでも皆さん、いま体力消費すると夜寝てしまいますよ？」

「あっ確かに…」

「くっそー！目の前に山も川もあるのにタマたち大人しくしてなきゃならないのかー！？」

「というかいま寝とけ。夜戦準備よ」

「夜戦…！」

「そうだ…。諸君、我々の本当の戦いは太陽が墜ちてから始まるのだよ……」

「…そういうことなら仕方あるまい…………タマはこれから…タマに秘められし真の力を呼び
覚ますために瞑想に入る……………」

……暑くて寝られん……入口空けてたら蚊が入るー…どうすればいいんだカエデー…」

「……………仕方ないのー……………すみません古波蔵さん、上がります」

「ああ。なにか策があるのか？」

「ええまあ……………ほれタマさんや…」

私がキンッキンに冷えた枕に成ったるから、おネンネなさ「ひゃあっ?!
…冷やしすぎだろ!!」

「おお…氷嚢……。どうした銀? 顔が赤い…まさか熱中症か?!」

「い、いえ大丈夫です棗さん。ただちょっと…その……………恥ずかしいというか…」//

「おーい、ぎーん! 冷え冷えだぞー!」

「ひゃあ……//球子さんがカエデさんをはがっちりホールドしてる……」///

「んん? もじもじして、どうしました？」

「カエデさんがこの前変なこと言ったせいじゃないですかっ!////」

「……………あー……………まあ…私は気にしないよ」

「アタシが気にするんですっ!!」///

「まあ、仕方なからう…? 別に私を抱け言ってんじゃあないんだ。手でも脚でも良いし、添い寝するだけでもそれなりに涼しくは成ろう。だから私のことは人形だと思えな？」

「なんだー? 銀。お前もしかしてカエデのことぎゃっ!?!」「お止しなさい」

「うう……」

「まあ、嫌なら無理をすることはありませんが、外よりはマシですから
…なにより熱中症で倒れられちゃ敵わんからさ。頼むよ銀さん」

「……………むう……………不束者ですが…」

「はい。どうぞ宜しく銀さん」

~~~~~

「夜だ！」

「真っ暗だ！」

「と思ったら月明りでメッチャ明るい！」

「月が綺麗ですね。(虫取り用語で『この明るさじゃあライトトラップ使えねえな』の意)」

「満月でっかいよなー。団子が欲しくなる」

「分かる。月見酒したい」

「アタシら未成年だからお酒飲めませんよ」

「私も飲んだことは無いが…漁師たちは皆、口を揃えて『仕事上りの一杯のために生きて  
いる』と言っていた…楓……」

「一々、シンミリさせに来ないで棗さん」

「だが…」

「確かに酒が飲めないのは残念だけどね。そんなのは今更大した話ではないのよ。

それに素敵な君達と共にいるのに不満なんてないさ。

私は君達のお陰で十分に満ち足りているよ。ありがとうね棗さん」

「……そうか」

「棗さんが頭撫でられてるのってあんまり見ませんね」

「棗は背が高いからなー……おいカエデ今なに考えた？」

「(タマさんメッチャ撫で易かったな身長とか性格とか色々と)

…さて諸君、灯りは持ったか?! ユクゾッ！」

「あ、おい待て! カエデーっ!!!」

~~~~~

とりあえずは外へ ランダムに歩かう くだらぬう〜めいっろっのお〜う

「おい、なんだカエデその…歌…? 頭大丈夫か…?」

「黙ってもいいですけど、一応、獣除けでもあるんですよ」

「なるほど……イヤッサッサ——」

「棗さんまで……何だこの集団…」

「下山中に絶対会いたくないやつな…」

「実際、山の怪談の何割かは虫屋(虫を捕ったり飼ったり標本にしたり売ったり食べたりする
蟲愛好者たちの俗称)の仕業だと思いますよ。白装束は遭難した時に発見され易いですし、
人気が無い山奥なら女性も稀に歩いてますし、山深くに突然現れる妙に軽装な人影だつたり
しますし、虫を探して不審な動きをしますし、たまに奇声あげますし」

「ジェミニ以上の変態集団だな……………」

ギ イイツキイイツツ!!!ヒツ!?パキパキ!メキメキツ!!!アギァアアアア!!!!

「イノシシか何かかな…? 赤子が泣く様なやつは大体盛りついた野良猫」

「視界が効かないと聴覚や皮膚感覚に神経が集中してしまうな。

銀。怖いなら手を繋いで行こう」

「び、ちょっとビックリしただけですよっ！」

「今回は良いけど、山ではできるだけ手はフリーにしといた方が良いつすよ」

「それでヘッドライトとハンドライトのセットってわけだな。こりゃあ便利だ」

「穴を覗き込むのなんかは、むしろ太陽光は影を作って邪魔なんよね。闇を見るなら闇に身を浸せてな。故に私は日中より夜採集派」

「なるほど確かに」

「水を見るのも夜行性のカニなんか簡単に見られて楽しいですよ。日光の水面反射が無いので川底までスッキリです」

「そういうのは早く言えよー!川過ぎちゃったじゃんかー！」

「すまんて」

「楓。さっきから居るあれはなんだ？」

「カマドウマやね。翅が無いぶん身が詰まってて美味しいらしいです。見た目が既にプリプリで美味そうだけど、血の匂いなんかも魚介っぽくて美味しそうですよ」

「血の臭いって…」

「ムカデの餌に捕ったりするのよ。それに魚の刺……いや言わんとこ」

「うわああん!止めてくださいよカエデさん!食べられなくなっちゃうじゃないですかー！」

「よいかね銀さん?生きていたらそれは食べものなんだよ。命は皿の上にて平等である」

「いや…毒がある場合もあると思うが…」

「『食べられる』ただし、死なないとは言っていない」

「なんつーか、ぶっ飛んでんなカエデは色々」
「生きているなら邪神だって食い殺してみせる」
「……たまに…たまにですけど、カエデさんから妙な視線を感じることはあるんですけど…違いますよね…？美味しそうとか思ってませんよね…？」
「ははは」

「否定しろよっ?!」
「棗さん、カエデさんが怖いですっ!!」
「楓……ペロは食べないでほしい…」
「味覚無え言うとするやろがい」
「美味しそうとは思ってるんだろ!?食肉的な意味で!」
「はい。いや落ち着けよ御前ら」
「落ち着いてられるか!……さてはおまえ新種のバーテックスだな!?白いし!!」
「そんなんっ…!?カエデさんと戦うなんてできませんよ球子さん…!」
「……………そのときは……………私がやる……………」
「棗さんに殺されるなら本望だけど棗さんの心を守るために絶対殺されてやらんよじゃなくて、ええかげんにせい」

~~~~~

「(まだ腐食が軽くて少し堅めの朽木……食痕…)

いた！」

「なんだ！？何か見付けたのか！？」

「オオゴキです。 …あっ、なんかのクワガタも居る」

「カエデさんにとって、オオゴキ>クワガタなんスね…」

「まあまあ御覧なさい銀さん。見た目も食ってるものもカブクワと変わらんよ。

…いやむしろオオゴキの方がお腹とかえっちな顔も可愛いやろ。見ろよ、この呼吸に合わせてフクフク動くむっちりお腹とか sexy すぎ、ハラビロカマキリに匹敵するエロい腹部はホンマ筆舌に尽くしがたい…黒翅と外骨格の漆黒に全身の艶めき、ウンコするときにくばあっと開く尻はホンマやーらしか。のっしりとした重みが掌の上で確かな存在感を放ち、厚みのある身体を振らせる度に体節から透けてみえる白い肉は誠美味しそう。太くてトゲトゲしい脚はイカしてんし硬くて鋭い鍵爪は美しいし、短くて数珠繋ぎのような美しい触角、可愛い顔、ゆっくりめの可愛い歩行スピード可愛い、寿命も数年あるし最高じゃん」

「……ホントだ、初めて見たけど結構かわいいかも…」

「せやろ？ 飼育も、水槽に朽木とか腐葉土とか入れて乾燥具合みとくだけでええんやで」

「楓、これは」

「ヤスデやね。マルヤスデの類。固い身体に連輪模様が美しい。波打つ脚が美しい。そして短い脚が可愛い。動きが可愛い。そして可愛い。ちなみにヤスデは体液に青酸系の毒があるので食べてはいけない」

「ちっちゃいかたつむりも居るぞ！…なんかちっちゃいサソリっぽいのもいるー！」

「くそかわやな。サソリっぽいのはカニムシやね。狙って捕ったことないから詳しくはない」

「朽木ひとつにいろいろ居るんスね」

「そうよ。

火の中、水の中、土の中、砂の中、泥の中、糞の中、草の中、木の中、森の中、木の上、地上、空中、空上、雲中、海上、海中、深海、体表、体内、この世のあらゆる所に蟲は生きている。つまり蟲を追う虫屋もこの世のあらゆる場所に出没する」

「火の中にも居るのか？」

「壁の外の赤道付近の泥炭地帯の森は自然発火するらしくてね。山火事に適応した虫が居るんだと。他にも温泉に産卵するトンボとか、うろ覚えだけど火山噴火後の焼けた大地に好んでやってくる虫とかもいるらしい」

「おお、遅いな」

「壁の外はなんか凄いことになってるみたいだけど、きっと誰かは生きている」

(始まりは神だったのかも知れんが、そこから先の食って食われては我々の歴史。

たとえ地球が爆発飛散してもきっと何かしらは生き残る。情報は拡散し、明滅を繰り返して複雑化する。

神が生きているモノなら、その領地にも我々は踏み込むわさ)

「でかいカマドウマ居るしムカデも期待できそうね」

「！ おい銀見ろ！こっちで白蛇がネズミ食ってるぞ！」

「わっ、ホントだ！ うわー…！うわー…！」

「おおー運がいいね」

「おお〜っ…！…かわいいなあ……！ なあカエデ連れて帰っちゃダメかな！？」

「そうねえ、蛇飼うなら動物取り扱い業の資格取るといいよ」

「蛇は飼うのに資格が要るのか？」

「いや多分アオダイショウかなんかの白変なんで飼うこと自体に特別な何かは要らないけど、見ての通り餌がネズミなんよね。餌のネズミの自家繁殖に資格が要るのよ。

ショップに行けば冷凍も活餌もあると思うけど、自分で養殖した方が安上がりだからね」

「なるほど」

「むむむ…」

「そう難しいハードルじゃないから心配しなくても大丈夫よ。好きこそその何とやらでタマさんなら突破できると思う。…まあでも、飼い切れないなと諦めるのも愛(思い遣り・勇気)ですよタマさん」

「…カエデ……………タマに勉強教えてくれるか…？」

「喜んで」

「……よし……タマは覚悟を決めた…！ タマに任せタマえ！！」

一番のハードルは餌にも愛着が沸いてしまうことで、個体数管理に失敗すれば生まれたばかりの子鼠を間引く必要だってある。畜産農家と同類の覚悟が要る。多頭崩壊が最も悲惨だ。だけどまあ……初めは私が代行しても良いし、野山で遊び回ってたタマさんならいずれ越えられるでしょう。

生きるとは食うことであり殺すことであり、生かすとは殺し続けることなのだ。  
みんな仲良く食って食われての修羅の道。

そして殺生与奪権を握ることを娯楽とする全ての飼育者は、もし飼い切れなくなり託す相手も居ないとなれば、可愛がっていたその子を自らの手で殺める覚悟を持たなければならない。それが終生飼育の誓いであり責任だ。

～～～翌日

「へっ、蛇!？」

「そうだゾ、あんずっ!…新しい家族のス○イブ先生だっ!」

結城友奈 赤嶺友奈 高嶋友奈 神奈 乃木園子

私の名前は結城友奈！趣味は押し花で、体を動かすのも好き！お勉強はちょっと苦手、好きなものはうどんとお父さんとお母さんと勇者部のみんな！そんな讃州中学 2 年生です！東郷さんと風先輩で始めた勇者部も、もう 6 年？……樹ちゃんに夏凜ちゃんに園ちゃんに…若葉ちゃんたち西暦勇者の皆、赤嶺ちゃんたちに、須美ちゃんたちに、芽吹ちゃんたち、そして未来から来た楓さんと神奈ちゃん…今日は、神奈ちゃんを新たに友奈トリオに入れて友奈かるてっと(?)を結成するために、高嶋ちゃんと赤嶺ちゃんと一緒に楓さんを探索中であります！

「見つからないねー」

「そうだねー」

「どこにいるのかなー」

「そのちゃん情報では『人気のない涼しい場所や水場によく現れるんよー』ってあるけど」

「そもそもどうして今日(部活無い日)なの？楓さん、私たち大好きだから部活で絶対会えるのに」

「思い付いたのが昨日の夜だったから！」

「思い立ったら吉日だね結城ちゃん！」

「それを言うなら『思い立ったが』だし、日付変わってるし…」

「えへへ♪」

「夏だし、やっぱり冷房が効いたお家に居るんじゃないかなー？」

「えっとねー？そのちゃん情報だと『楓さん、創作活動するとき以外は、冷房のコンセント抜きちゃってるー』だって」

「園子ちゃんは物知りさんだね！」

「『義体になって移動能力が上がったから、夜のうちに部屋を出て山頂や川の中に居たりするー。今日はもう出ちゃってるみたーい。……何度探しても、えっちな本が見つからない…やっぱりいつも持ち歩いてる PC かなー？』だってー」

「……園子さん今どこに居るの？」

ピロ『楓さんのお部屋にいるよー』

「そうなんだ！」

「そうだ。園子ちゃんも一緒に来ない？」

ピロ『今日はお留守番してるー。楓さんが帰ってきたら連絡するねー』

「そっかー、行き違いになっちゃうかもしれないもんね」

「… (……触れないでおこう…)」

「それじゃ、何処から探そっか？」

「登山は行くのも帰るのも時間掛かっちゃうから川？」

「ちょっと思ったんだけど、楓さんの出現ポイントってオバケみたいじゃない？」

楓さん出現ポイント：

人気のない涼しい場所や水場。山にもよく出る。日中は動かず日が沈むと活動を始める。

(ついでに冷気も放っている)

「ホントだ…」

「楓さんはオバケだった…？」

「否定はしない」

「否定しないんだ…」

「いっぺん死んどるしな」

「「楓さん?!」」

「おう。楓さんだ」

「神出鬼没……ますますオバケっぽい…」

「乃木さんから連絡が来たんだけど、何か御用？」

「そっか、呼べば来てくれるんだ。…盲点だった」

「神奈ちゃんを、私たち友奈シスターズの仲間に入れてあげようと思って探してたんだー」

「だそうですよ神奈さん」

「……………ありがとうございます。でも楓くんの身体だし…申し訳ないよー…」

「そんなことだろうと思いました。ほとんど表に出てこないのもそういうことですね？」

「だって…」

「本当に気にしいですね。分かってんですよ？私に降りたのも私に気を遣ってのことだし、私がスケベ画像け「だめえええええ!!!!!!!!!」」

「うわあ……楓さんっていつも神奈先輩に、そういうことしてるの…？」

「誤解です誤解です神奈さんに見せられない画像の削除中にちょっとあったってだけですだからそんな目で見ないで引かないでガチな感じやめて赤嶺さん……」

「フッフ♪ そうだよねー。楓さんは私に嫌われたら死んじゃうもんねー?♪」

「いや……落ち込むけど死にはしな「楓さん? # #」

「いえテレカクシです死ぬほど落ち込みますはい」

「そっかー♪」

「あの楓さんが赤嶺ちゃんにはタジタジだっ！」  
「旦那さんの浮気を咎める奥さんみたいだね！」  
「ち、違うよ?! そんなんじゃないから!!」  
「「またまた～」」  
「違うってば!!」  
「からかわれ上手な赤嶺さんは稀によく見るレアなやつですね」  
「楓さんまで乗らないで!……ほら、楓さんには神奈先輩も居るしさ!!」  
「あってめえ!!」「やっぱり嫌…?」  
「嫌じゃないけどそういうのじゃないというか私は勇者部の誰ともそういう関係には成りません!!!」

「それは…」  
「ちょっと寂しいよー…」  
「…どう思われようと、なんと言われようとこれは曲げません。別に、勇者部の皆さんと仲良くするのが嫌なわけではないので……その…すみません…」

「そうそう。つれないこと言っても楓さんは最初尻に敷かれるタイプだから大丈夫だよ」  
「ちくしょうにげられない!」  
ピロ『逃がさないよー!』  
「どこから見てんだ己は!?……いやマジでどこ…」  
ピロ『……私の精霊は21体です』  
「園ちゃんって、たしか楓さんの部屋でお留守ばむぐっ!「しー!? 結城ちゃんしーっ!!!」

「……………初耳ですわ♪……………どういふことかしらね? 乃木園子さん?」  
ピロ『…… (のω<;) ☆パチーン』  
「こっちみる おい。今そっち行くからな? 今逃げてても学校で会うからな?」  
ピロ『ユルシテ…ユルシテ…』  
「好奇心は猫殺し……………」  
「楓さん…?」  
「……ちょっと急用が出来てしまったので…皆さんすみません…」  
「そうだね……結城ちゃん日を改めよっか」

「うん。じゃあ、楓さん神奈ちゃん！またね！」

「おう。行ってきますわ」

===

「わっ！…飛んでっちゃった」

「……楓さんの機動力ってちょっと変じゃないかな…」

（大赦の技術が使われているとはいえ、神樹様に力を貰っているわけでもないのに、変身した私たちと変わらない跳躍と高速移動ができる……たしか精霊も見えていた…でも勇者じゃない…）」

「どうしたの赤嶺ちゃん？難しい顔してるよ？」

「…ううん、ちょっと不思議だなって思っただけ」

「すごいよねー。ビュビュンって、あっという間に見えなくなっちゃった」

「楓さん角生えてるし、オバケみたいなどこあるし新しい都市伝説に成っちゃうね」

「都市伝説っていうか、もう怪談だよねー…」

「隠したりしなくて良いのかなー？」

「うーん……一応勇者じゃないから良い…のかな…？」

「私たちは、この後どうしよっか？」

「神奈ちゃんと遊ぶつもりだったもんねー」

「まだ居るか分からないけど楓さんち行ってみる？」

~~~~~

うむ……とりあえずスマホ取り上げて、後ろ手に縛ってみたがどうするか……

私と同じでくすぐり無効だったし、痛めつけるわけにもいかんし、退屈にも耐性あるっぽいし、まして辱め(はずかしめ)るわけにもいかん。どうしたものかなー……

……………しかし本当に綺麗な顔面してんな。さすが豪族の娘。

丸呑みにして口の中で弄びたい。

噛めば噛むほど血とか味とかしみ出て、すごくおいしそう。ワイングラスが割れるときみたいなキラキラした悲鳴とか上げちゃうかな？最高にそそる。じゅるり。

逆に食べられるのもありだよな。

できれば直接齧り付いてほしいけど人間の顎で噛み千切るのは難しいからナイフで削ぎ落としながらになるかなあ。

肉体接触よりも粘膜接触よりももっと深くて近い、僕はこの子の血肉として溶け合っ一つに成るんだ。血液を介した邪淫は、それはそれは痛くて気持ちよくて救われた幸せな一時となるだろう。ああ……堪らないね……………喰い喰われ、殺し殺され、存在のすべてを捧げるように愛し合いたい。君を愛したい。まあ既に血も肉も骨も無いけれど

「あの一…… そんなに、まじまじと見つめられると恥ずかしい一……」

「……………なるほど」

「……止めてはくれないのかなー…？」

「このまま日が暮れるまで眺め続けることにする」

「で、でも私の懲罰のために楓さんの時間を取っちゃうのは申し訳ないなー……？」

「いえいえ、乃木さんの美しいご尊顔を一日中眺めていただけるなんて、私はなんという幸福者でしょう」

「うう……恥ずかしいよう……」

「…そうだ。まだお礼を言っていませんでしたね。

あのときのあれは……とても嬉しかったです」

「あのとき…？あの…いえ、ううん…こちらこそ……」

「感謝しています。ありがとう御座いました」

「…どういたしまして……」

「「……」」

「……うん、なんでもない…♪ 困らせちゃうだけだよね」

「そうですか」

「うんっ

現実に戻ったらきっと楓さんとは二度と会えないし、今こうしていただけるだけでいいの」

「…そうですね。私も同じ気持ちです」

「エへへ、両思いだね？」

「まあ野暮なことを言えば、私は貴女たち全員に対してですけどね」

「本当に野暮だよー」

「ごめんなさいね」

「いいよ。分かってるから。

……でも…せめて下の名前で呼んでもらえると嬉しいな…？」

「いつも周りに遠慮してばかりの貴女様から請われるとは、光栄の極みに御座います。

喜び、謹んで呼ばせて戴きましょう……

…

園子さん」

「ありがとう楓さん……少しこそばゆいね」

「そうですね」

「両思いの子を後ろ手に縛って、抵抗できなくしてるのに楓さんは何もしなくていいの？」

「分かってるくせに聞くんですか？意地が悪いですよ」

「……うん、義体じゃなかったとしても楓さんは私たちにそんなことしないよね。

大切にしてくれるのは嬉しいけど、ちょっと寂しくもあるんだよ？」

「そいつは、すんませんね。あたしゃ頑固モンなんでさ」

「わかちゃんと、どっちが頑固かなー？」

「どうでしょうね？」

でも上里さんに迫られたら簡単に骨抜きにされそうじゃないですか若葉さん？」

「あー、ありそー」

===

月下。一人で寝ていると、来訪者の重みで布団が沈み込むのを感じる。

(まさか天来教が刺客を？残存勢力が居ても、向こう数10年は再起できないはずだが…)

そんな不穏な予想も一瞬のことで、侵入者に気取られないように薄目を開けると眼鼻の先に愛しい親友の端正な顔が迫ってきて……い「わあっ？！！」

「ひひひなた？！！どどうしたんだ今日は！？」

「若葉ちゃん……ずっと傍に、一緒にいてくれるって言いましたよね…？」

「あ、ああ。言ったが何か関係があるのか…？」

あれは人類が天の神に敗北して間もなくのことだ。

私たち勇者の最も近くに居たひなたは、傷付く仲間たちに対しての無力感や不甲斐なきに胸を痛め続けていた。

バーテックスに殺されてしまうかもしれない壁の外に出たときも、球子と杏が死んだときも、千景に拒絶されたときも、次々と死んでいく仲間たちの亡骸を清めるために寄り添っていたときも、炎に包まれた死の世界を見せられたときも、奉火祭に知り合いの巫女たちを送り、私のために一人だけそのお役目から逃れたのに、私のせいにするのを拒んで「自分が酷い奴だからだ」と自責の念で苦しんでいたときも決して取り乱しはしなかった。

そんな私たちのために気丈に振舞い続けていたひなたが、初めて年相応に恐怖に挫けたときに私が誓った言葉だ。忘れるわけがない。

「……大社を大赦へと一から立て直し、必要とあらば嘘も吐きました。

心を鬼にして千景さんのことも闇に隠しました。

不穏勢力には圧力をかけて潰しました。

後継もしっかり育てました……彼女は、たまにドジなところもありますけど、俗人性を廃したシステム作りには気を配りましたからね……きっと大丈夫です。

だから…

だから……もう大丈夫ですよね…？……わたし……もう十分頑張りましたよね……っ…」

「ああ……私は英雄として崇められていたから
市民の先導もそう難しいことではなかった。だが、ひなたはそうではない。

黒い噂もよく聞いていた。

ひなたは口には出さなかったし事故扱いになっていたが、大社だったころの上層部を筆頭とした強力な保守勢力との争いが激しかった筈だ。影響力を維持するために苦虫を嘔み潰しながら汚職に目を瞑ったこともあっただろう……お陰で、ひなたに意見できるのは今では昔なじみの側近数人だけだ」

「ひなた」

「これまで本当に、よく頑張ってくれた。
未来のために。散っていった仲間たちのために。よくここまで尽くしてくれた。
ありがとう、ひなた。後は私に任せてくれ。私がひなたの想いのすべてに報いよう」

——何事にも報いを。すべてに報いを。

それが乃木家の生き様だ。立ち回り上、止むを得なかったとはいえ、ひなたには辛い役目ばかりを背負わせてしまった。そして十分に。最後までひなたは全うしてくれた。ならば私はひなたに報いねばなるまい。

「ありがとう御座います若葉ちゃん……」

「フッフ、私とひなたの仲だろう？」

「わたし、お世継ぎのためでも若葉ちゃんを他の人に取られるなんて耐えられません……
ですから、おねだりしても良いでしょうか？」

うん？

「…ひなた？」

「わたし若葉ちゃんとの子供が欲しいです」

「ひひひひひなたぁ！！？」

かっ『私がひなたの想いのすべてに報いよう…』

「フッフ♪ 言質もバッチリ取れました♪ 私は狡い女なんですよ？若葉ちゃんっ♪」

== =

「うん、間違いなく若葉さんは手玉に取られる。折れる。賭けてもいい」

「尊い…わかちゃん尊いよ…真面目かっこいいのに天然可愛い過ぎるよ、わかちゃん…」

「ぐう分かる」

「楓さんも、わかちゃんみたく可愛く折れてくれたりしない？」

「しない」

「えー」

「私は冷徹で冷血にして冷酷な鬼畜外道丸なんですよ」

「でも、世界と私たちを天秤に乗せられたら「世界を滅ぼします」

「…自分の命を捧げれば、世界も私たちの命も救えるってときは「喜んで腹を切りましょう」

「冷酷…？」

「はい」

「悪ぶってるだけじゃないのー？」

「“大事なもの側”に居る園子さんにとってはそう見えるかもしれませんが、“大事じゃないもの側”に対して私は一切容赦しませんからね。私は黄泉の穢れが生んだ邪神様ですわよ？」

「おおこわいこわい」

「……今更だけど、わたし黄泉帰りしたんだよな…

神話通りなら相当な穢れを纏っているはずだけど、それに降りた神奈さん大丈夫なの？」

「えっ、あっ、わたし!？」

「ういっす」

「むー、神ゆーゆだけ皆のこと覚えてられるの、ずるーい…

楓さんとずっと一緒なの、ずるーいー…」

「う、ええっと…」

「そう言いなさるな。神奈さんも本当は私なんぞに憑きたくはなかったのよ。でももう一人の自分が郡さんと毎日チョメってるのを指啜えて見続けて遂に我「きゃああああっ!!？」

「……もー！意地悪しないでよっ！！」

「私も自分も救って私を救うのでしょうか？」

「なら表に出て、しっかり勇者部員になっていただかないと」

「…うー…」

パツッ!

「話は聞かせてもらったあー！！」

「フッ…私たちの出番のようだね、お嬢さん」

「その話。私たちに任せてもらいましょう…」

「むむっ、君たちは！」

「因子に引かれて現れたか！！」

「讃州中学勇者部一の元気娘とはっ！」

「まさに私たちのこと！」

「人数増えて大分影が薄くなってる気がするけど…？」

「「赤嶺ちゃん！？」」

「結城ちゃん赤嶺ちゃん……私…」

「…やっぱり来ちゃったよ。もう一人の私」

「神奈先輩の事情は良く知らないけど…私が言うのもなんだけど、良いんじゃないかな？神奈先輩のお陰で私たちはまだ生きてられるんでしょ？ちょっとくらい休んだっていいと思いますよ」

「ずっと傍に居てくれたのに、気付いてあげられなくてごめんね…

寂しかったよね神奈ちゃん…」

「みんな……」

「これからは一緒だよ。だからあなたも私たちのところに来て、輪の中に入って」

「……いいのかな…っ……」

「……私を外から見るとこんな感じなんだね…

良いんだよ私……私の代わりに私が私を救すから…

……もう……私には十分頑張ってるから……ね…？

もう良いんだよ…っ…………わたし……」
…ヒック…ツグ ……ウゾ ……

「たがじまちゃん…！がんなぢゃあんっ…！」
「…私も……………なんでかな…」

「……ゆーゆ達は人一倍頑張り屋さんだからね……
なんでも話して。
私たちを頼って。
私たちに助けさせて ……何も遠慮しなくていいんだよ。ゆーゆ」
「うん…っ」

(……園子さん良いこと言ってるけど、縛られてるせいでちょっとシュール……)
~~~~~

「ねえ楓さん、聞きたいことがあるんだけど」  
「如何なされましたか赤嶺さん」  
「神奈先輩が喋ってる時も楓さんの意識はあるんだよね？」

「…黙秘しま「あるよーっ！」神奈さん…っ！！？」  
「そっかー。じゃあ高嶋先輩と抱き合ってたときも、ちゃん意識はあったんだねー？」  
「ふえっ！？///」  
「…ええい、私は悪くない！！せっかく気を利かせて闇に葬ろうとしていたのにバラしちゃう「私」んと「私」が悪い！！…止めて神奈さん！名前に被せないでっ！」  
「えへー♪」

「ほほーん…神ゆーゆは悪戯っ子なたかしーなんだね。小悪魔度アップで打点高いよ〜？」  
「実体がないから叱るに叱れない悪戯っ子とかタチ悪いわよ」  
「でもそれって楓さんもそうじゃない？」  
「…いや、私は義体壊されたらどうなるか分からんけど、神奈さんは憑依してるだけだし」  
「じゃあ、今日みたいに跳んで帰ったりするのは危ないんじゃないかなー？」

「あ、そうそう、楓さんの異常な機動力の高さってどういう理屈なの？」

「んー？」

「多分それは神ゆーゆが原因なんじゃないかなー？」

「どういふこと園ちゃん？」

「西暦の頃は精霊を体内に降ろして戦ってたって話は覚えてるー？ゆーゆ」

「切り札だね、園ちゃん！」

「そうー。それで楓さんは英霊で神霊の神ゆーゆを内に降ろしているわけじゃない？」

「…そうか…！だから勇者並みの動きができるんだ…！」

「そゆことー」

「おう…？つまり私は武器さえあれば、勇者じゃないのに勇者並みに戦うことも不可能じゃないってことか…？……………何か妙だな…神の所業にしてはサービスが過ぎる……」

「そうだねー、黄泉の穢れのことにも気になるし慎重にはなったほうが良いと思うー」

「……穢れが神を生んだのか、神気に当てられて穢れが神に化生したのか。後者ではあるんだろうが神気なら神奈さんにもあるはずだしな…どこに行っているのか不穏だ…」

「中立神様が支配する夜の食国(おすくに)は、確かに沖つ国に近い位置にあるけど…ご意思までは分からないかな…」

「まあ、こうして神奈さんが神側の知識を持ったまま試練を与えられる側に来れているのも不思議ではあるしな」

「黄泉の国に何かがあるのかなー…？」

「私が殺されたのは不敬が原因かと思っていたが……」

黄泉国(よもづくに)というと片割れの女神だな……天神は憎き男神の…まさかなあ……」

「うーん……それは中立神様もそうだし…」

「やっぱり黄泉路探索は不可欠っぽいよな」

「でも危ないよ…？」

魂だけで降りることになるから私も着いて行けないし、次は帰って来られないかも…」

「そもそも、どうやって行くのー？」

「死ねば行けるだろうけど、義体を壊すのはちょっと嫌よなー…どうやって私が肉体から義体に入ったのか思い出せれば、出入りできる気はするんだが……」

「……………実はこっちが本当の試練で、邪神様の暴走は黄泉の穢れのせいだったりして……」

「…ありえるわー……それそう考えるとメッチャそんな気がしてくる……………いや、ちょっと待てそれ黄泉路探索の方法が見つかって私が黄泉国に出入りを繰り返したら神奈さんの神気で邪神顕現するフラグでは？神生みフラグでは？ヤベーやつでは？」

「ま、まさかあ…」

「何なら黄泉大神の霊力採取して来いとか、煽動して味方につけろまであり得るぞ…？」

「そしたら楓さんは、氏神じゃなくて落とし神さまに成っちゃうのかな…？」

「そのときはせめて閻魔王と呼んでほしい…黄泉と冥府は多分ちょっと違うけども…」

「それじゃ、神ゆーゆは泰山府君(たいざんふくん)辺りかなー？」

「クッ……着いていけない…！」  
「私なのに私が言ってることが全然分かんないよー…」  
「もー！そういう知識が必要なら、どうして造反神様は私の消しちゃったかなー！？」  
「煙出てるけど結城ちゃん大丈夫…？」  
「……………うーん……うーん？……」  
「いけない…！私たちの中でも特に純水栽培な結城ちゃんには難しすぎる…！」  
「結城ちゃん…！これ以上聞いちゃダメっ…！」  
「わた…わたたわわたしのの名前はっ、わっ、……………有機友奈…？」  
「有機ちゃん、しっかりして…！気をたしかに持って…！自分を思い出してっ…！」  
「高嶋先輩も落ち着いて！？漢字間違ってるよそれ！！」

「まあ…小難しい話はこの辺にしときましょうか」  
「そうだね。私もちょっと整理したいし」  
「せっかくだからランプでもあればよかったんだけど、楓くんの部屋って娯楽の類が全然無いんだよねー…」  
「PC一つあれば暇潰しには困らんからな」  
「はいっ！ 私は楓さんのえっちな隠しフォルダ検索がしたいです！！」  
「そんなものは無いし在ったとしても削除済みです」  
「……ごめんね。私のために…」  
「あなたのお陰で禁欲も苦じゃありませんよ」  
「楓さんがまた口説いてる…」  
「おやおやおや？嫉妬ですか？赤嶺ゆーゆは乙女さんだねえ良いよ良「や め て ！」」  
「だいたい、本当に嫉妬してるのは園子さんの方じゃないのかなー…？私たちの前だからって隠さなくていいんだよー？素直になっちゃいなよー」  
「…なんのことー？」  
「さっきの園ちゃんすっごく可愛かったよ！私もドキドキしちゃった！」  
  
「……………いつから見てたのかなー…？ゆーゆ」  
「んーと『まじまじ見つめられると恥ずかしい』の辺りからかな？」  
「……まあ、神奈さんも同伴だったわけですし…園子さん？」

「…ううっ……ううううう……っ…！」

「園子ちゃん！？」

「なっ、泣くほど恥ずかしいの?! 園子さんごめん!!」

「そのちゃんごめん! 泣かないで…！」

「今回はいつものようにのりくらりとも行きませんし、乃木家は受けにまわってガードを突破されると弱いんですよ。

……ほら園子さん…恥ずかしくたっていいじゃありませんか」

「皆さんには隠しておきたかった秘密を知られてしまって辛いんですね。

お友達に刺されると思っていなかったから少し悲しいんですね」

「今、あなたは叶わない想いが切なくて辛くて苦しくて、守っていた心の平静が崩されて、感情が入り乱れて、どうすればいいのか分からなくなっているんですね」

「良いじゃありませんか。

そのお陰で私は園子さんを抱き締めて頭を撫でる口実を得られましたし、さすがの私も折れてしまうかもしれせん」

「そんなの嘘だよ…楓さんは涙くらいじゃ折れでくれない…」

「………そうですね。私は冷徹なので涙程度はそよ風のようなものです。

ですがね園子さん。園子さんのその切なさや諦観は私がいつも感じていることなのです。

私は私が大好きですから

私のような想いや苦しみを抱えるあなたは、私にとって特別愛おしく想ってしまう人なのです。あなたの想いに報いたいと感じてしまうのです」

「気持ちばかりで、叶えてあげられないのが私の苦しみです…与えられるものが無いのが私の苦しみです…軽はずみに何かを与えれば、執着を与えれば、失うときに余計にあなたを苦しめてしまうだけなのが私の苦しみです…」

「ぜんぜん…っ私と違うよ楓さん…っ、私は、無くしてしまうのが辛いから、線を越えられないだけでもん…っ…! ………だから楓さん…傷付けちゃうかもなんて考えないで…? …楓さんの心のままに…私を欲しがって……」

~~~~~

想いに想いをぶつける作戦は上手く行ったけど……

益々もって園子さんが可愛く想えて辛い……泣かせてしまったお詫びに『ゆーゆたち同士のイチャイチャがみたーい』と無茶ぶりを仰った園子さんは現在私の膝の上に座っており、私が後ろから抱き込む姿勢を維持し続けています。

肉体を失っていて助かりました。どんな誘惑攻めを喰らっていたか分かりません。ぶっちゃけ目に涙を湛えて『私を欲しがって…』の時点で禁じ手だと思います。あなた絶対わざとでしょ。謀ったでしょ。だってあなたそういうキャラじゃないでしょ。何処からが演技だったのさ孔明。まんまと踊らされてしまったわよ孔明。故に愛を冠せし天使マーラよ。去り給え。幾ら御前とて、欲を満たすための肉を持たぬ私には徒労に過ぎようぞ。

〜〜〜

路地裏にガムテープで拘束された少女と、鬼が一人。

どうにか説得できないものかと、自身をここに追い詰めた鬼に対し声を投げかける。

「高嶋先輩…っ！ どうしてこんなことっ…！」

「赤嶺ちゃんが悪いんだよ……赤嶺ちゃんがあの人から寵愛を賜ったりするから…」

鬼の名は高嶋友奈。

高嶋友奈は赤嶺の所属する部活の先輩にあたり、周りからは『姉妹のようだ』と評されるほど仲の良い友人だった。何より、高嶋友奈はいつでも前向きで明るく、困っている人を見れば迷わず手を貸し与え、泣くものあれば寄り添い共に泣き、不穏な気を感じれば朗らかに笑顔を咲かせて散らしてしまう。

彼女は少し天然者でもあり、嘘の付けない性質の高嶋友奈の冗談は、眉間に皺を寄せた大人も、癩癩を起こしグズリ泣く子供も区別なく周りすべてを笑顔に変える。

赤嶺友奈は、そんな快活で思慮深く裏表のない高嶋友奈が大好きで憧れていた。

「あの人……？ 痛いっ！「ねえ、ふざけないでよ……ちょっと胸が大きくて見た目がいいからって、あの子の優しさもドブ底の砂礫の様にしか感じてないの…？ 酷いよ赤嶺ちゃん……そうだ。良いことを思い付いちゃった……フフッ…」

乱雑に引き上げた赤嶺の髪を放し、常闇を呑んだ高嶋の瞳が不気味に揺らいで桜色のペンケースからコンパスを取り出す。

「高嶋先輩……？」

「ねえ赤嶺ちゃん…どうしてそんな不安そうに私を見るの？ 心配事があるなら私に相談してよ……大好きな赤嶺ちゃんのそんな顔…わたし見たくないよ……」

その言葉は、悩みを抱えた他人を慮って、相手のすべてを受け入れようと寄り添う高嶋のいつもの調子で放たれた。異なるのは高嶋の左手に凶器が握られていることと、不安の元が高嶋自身であることだ。

「良く研がれた針って、刃物と変わらないんだって♪」

何がそんなに楽しいのか鬼が柔らかく笑って近付いてくる。

「嫌……来ないで…許して…」

「酷いよ赤嶺ちゃん…私のこと嫌いになっちゃったの…？いつもみたいに笑ってよ」

優しく抱き上げて鬼が赤嶺の顔に鼻を摺り寄せる。

優しい高嶋友奈の面影と、狂気に満ちた鬼の姿が、ちぐはぐに重なっていて恐ろしくて恐ろしくて仕方がない。叶うことなら夢であってほしかった。

本当はただ怖い夢を見ているだけで、目が覚めるとそこは部室で…目の前には優しい高嶋先輩の笑顔があって…『部活中に居眠りしちゃうなんてどうしたの？いつもの赤嶺ちゃんらしくないね。…そうだ！オネムさんな赤嶺ちゃんには、先輩が毛布と枕を用意して進ぜよう！』なんて冗談を言って膝枕をしてくれるんだ……いつの間にか赤嶺は恐怖ではなく、失われてしまった日常への寂しさと悲しみで涙を流していた。

「どうしたの赤嶺ちゃん?! どうして泣いてるの?!」

鬼の目にも涙があった。

しかし心配する言葉とは裏腹に、憎しみに固く握りしめられたコンパスが振り上げられる。そんな顔をするな。そんな目で私を見るな。止めろ。と今凶刃が振り下ろされ――

「高嶋っ!!」

「何してるの？高嶋ちゃん?!」

「……結城…ちゃん？」

高嶋の最愛の人からの呼び掛けにより、間一髪のところでは赤嶺の顔が切り裂かれることはなかった。高嶋友奈は見られてはならない人に見られてしまったというように顔を青ざめさせる。赤嶺を降ろし、駆け寄る結城友奈から逃げるように震える脚で後退る。

「大丈夫、赤嶺ちゃん!？」

「痛っ…結城ちゃん、どうしてここに…」

「そんなことどうでもいいよ!何があったの!?…高嶋ちゃん」

そこには既に鬼は無く、死の宣告を震えて待つ憐れな少女が立っているだけだった。

「ち、違うの……わたしこんなつもりじゃ……嫌…そんな目で見ないで……」

「……高嶋ちゃんがそんな人だったなんて知らなかったよ」

判決が下される。

罪人は逃げることもできずに、目も耳も塞いで蹲る。

鬼は赤嶺を切りつけ、服を引き裂き路地裏に放置して、怯える小動物の姿を愉しむつもり

だった。そんな邪悪な女をあの人には許さない。抱いてくれない。微笑んでくれない。

許されることなら絶望の言葉を聞いてしまう前に殺してほしい。そう高嶋が泣いていると温かいものに包まれる。

「高嶋先輩…」

「どうして……………？ ……赤嶺ちゃん…」

「わたし知ってます…高嶋先輩が本当は嫉妬深いことも、怖がりなことも、寂しがりやなことも、知ってるんです。怖がりな高嶋先輩が誰かを傷付けることなんてできないって……………私は…そんな高嶋先輩が好きです…。ずっと一緒に居てください…」

「赤嶺ちゃん…っ赤嶺ちゃん…！怖かったよね…痛かったよね…ごめんね赤嶺ちゃん…！許してくれなくってもいいよ……………ごめんね…っ…ごめんね……………」

二人は泣き止むまで、互いの温もりを求めて抱き合っていた——

~~~~~

「一時は、どうなっちゃうかと焦ったよー…」

結城友奈がそう呟き、高嶋友奈が謝意を述べ、赤嶺友奈が気にするなと繰り返す。

時刻は既に18時を回っている。三人は『これで仲直りだねっ！』と結城が握手をさせた後、路地裏から出て帰路を歩いているところだ。

「そういえば高嶋先輩。『あの人』って誰のことだったんですか？」

「なんのこと赤嶺ちゃん？」

「高嶋先輩が言ったんじゃないですか……………“寵愛”とか“賜る”とか高嶋先輩が難しい言葉使ってて凄く怖かったんですけど…」

「えー…？私そんなこと言ったかなー……………」

「まあ…まるで何かに憑りつかれたみたいだったし…無意識だったのかな…」

「こ、怖い話より、楽しい話しようよ二人ともっ！……………今日の晩御飯のこととか！」

「お腹空いてるの？」

「違うようっ?!」

夕日を背にして歩く三人の瞳は、深い闇の色をしていた……………

「…たかしー→ゆーゆ→赤嶺ゆーゆ→たかしーの、嫉妬のトライアングル愛憎劇かと思ったらホラーだったよ……」

「お気に召されませんでしたか？」

「なぜか高嶋先輩がいつもの大根演技じゃなくてホントに怖かった……

というかなんで私がヒロイン役…」

「結城さんはヒーロー属性強すぎるので闇を持たせるなら尻尾を出さない黒幕風に、高嶋さんにはしっとりと不穏さを、お役目で影を背負ってる赤嶺さんには純真さがギャップで映えるかなーと」

「可愛かったよ赤嶺ちゃん♪」

「わたし黒幕だったんだ…！ 全然気付かなかったよ！」

「楓くん、相変わらず病んでるなあ…」

「私からしてみりゃ、どうでもいいその他大勢のために命張ってる貴女達のが、よっぽど病んで見えますよ。…結城さんは黒幕風であって黒幕じゃないです」

桐生静 国土亜耶 楠芽吹 神奈

「楓先輩♪こちら本日のお供え物です♪」

「いや…だからこんな受け取れませんか…義体だから食べられませんで…」

「そうですか…申し訳ありません楓先輩…」

「いや、凄く嬉しいんだけどね…？食べられないから…」

「どうでしょう芽吹先輩…わたし神樹様にしかお仕えたことが無いので、楓先輩にどのようにご奉仕すれば良いのか分かりません…」

「ご奉仕しなくていいと思うわ亜耶ちゃん」

ガラッ

「オッ疲っれちゃ——ん？ なんや？ 何しとるん？」

「静先輩。お疲れ様です♪」

「あややんは今日も今日とてプリチーやな！そんで、どないしたん？」

童女説明中

「アッハッハ！なるほどなあー！邪神様やもんなあっ…！ふっふぐぐ…」

「…せやなあ、邪神への捧げもの言うたら

人身供儀・人身御供(じんしんくぎ・ひとみごくう)が基本ちゃうか？」

「うう……私の命は一つしかないので…

捧げてしまうと、神樹様にご奉仕できなくなってしまいます……困りました…」

「ちゃうちゃう…命まで差し出さんでも身体を使うてやな…？」

「桐生さん」

「……なーんてな！冗談やさかいそんな眉間食いしばらんといてー。笑いやブッキー」

「供物なあ…」

「おっ？うっちーなんか欲しいモンあるん？」

「…『愛』……かな ドヤ」

「ブッ!!! アハハハハッ! 愛ッ!! 愛かー! ほれ、あややんめいっぱい愛したりー!」

「えっと…どのようにすればいいのでしょうか…」//

「…楓さん？」

「冗談やってー。二人とも素直で可愛なー? なー? きりりん氏」

「なー? て、きりりんてw w うっちーからそんな緩いあだ名だ出るとは思わなかったわw」

「せやろか？」

「せやで」

「せやっけかー」

「なんやその“せや”の使い方w w w」

「まあ、真面目な話。幼女だろうが、少女だろうが、老女だろうが私は抱けるけど、

それより国土さんが健やかに生きていてくれることが何よりの奉公なのですよ亜耶さん」

「～♪ ありがとう御座います楓先輩♪」

「おとんか、お爺みたいなやっちゃん。去勢されて枯れてしもたん？」

「私ってば可憐な乙女だから下ネタとかついてけないー♪」

「ウチが下ネタ大好きみたいなるやろ、やめーや」

「桐生さん巫女なのにな…」

「やめーや。ホンマにやめーや」

「冗談やで」「んもうっ」

「二人の遣り取りを見てると、なんだかすごく疲れるわ…」

「笑えよメブーキ」

「…………ツッコミって叩いたりするのよね？」

「ごめんなさい。素敵に微笑みながら、拳を固く握りしめないでください」

「なんでやねんっ」

「国土さんそこ突っ込むタイミング違ーう。ちょーかわいいー」

「えへへ、間違えちゃいました//」

「おっふ……これはすごい逸材やで…」

「きっとこの先、沢山の男の子達を無自覚に虜にして泣かせるんでしょうな…」

「亜弥ちゃんを変な目で見ないでください」  
「おっと…ここにも一人、あややんの魅力に虜にされた奴が……」  
「いえいえ桐生さん、お二方は…ヒッソリ」  
「あっ…そうかも…ヒッソリ」

「あっ、やべ逃げるわ」  
「あっ、ちょ！？置いてかんといてええー！！……」

「『嘘だよ…』僕が君を置いて逃げるわけないだろう…？」  
「やだかっこいいーwww」

「なにこの茶番……呆れて怒る気にも成らないわ…」  
「静先輩と楓先輩は仲良しさんなんですね♪」  
「そうでしたっけ？桐生さん」  
「ウチに対しては、うち一割とドライなんちゃう？」  
「私と郡さんとの関係を乾燥させた感じで無遠慮なだけじゃないかな」  
「…そうなんですか？」  
「まあ別に嫌いじゃないけど、お互いに腹の内を曝さない距離感よな？今んところ」  
「さみしーなー。ウチはこんなにもうち一を愛しとんのにー」  
「棒読みやんけ」  
「バレたか」  
「まあでも本当は静のことも愛してるぜ？」  
「ハッハー！ありがたき幸せー」

「こんな具合ですわ」  
「どういうことなの…？」  
「なあ、うち一。ウチら似たモン同士やと思わん？」  
「おいおい、清純な巫女さんが邪神に似てるなんて、けったいなこと言うモンじゃないぜ？」  
「せやな」  
「おうともよ」

「いつか夏凜が、楓さんは私と気が合いそうだとか言っていたけど全然着いてけないわ…」

「せやけど、うちの経歴を聞いた限りじゃ二人とも頑固でストイックやし、神嫌いやし、ものづくりマンやし、(元ポッチやし) 気合いそうやん？」

「楓さんが作業してる時の雰囲気は嫌いではないけど…」

「式はいつにしょっか！芽吹チャン！」

「こういう雑で軽薄なところが凄くイラっとする」

「あちゃー、振られてもうたなうちー。ウチで我慢しとくか？」

「本気にするから止めとけそいうのは」

「プロポーズ乱発するうちーがそれ言うんかい…」

「私は義体だし、歌野赤嶺弥勒さんには言ったけど、私が勇者部の誰かと結ばれるようなことは天神が許しても私が許しませんからね。ただ滑稽なほど格好付けたがりなだけなのよ」

「だから特定の誰かに言葉が集中せんよう、全方向に口説きまわって逆に『誰にも気が無いんやな』と思わせるわけか。もしうっかり口説き落としてまったとして、実情が不明でも嫁候補の多さがそのまま牽制になるっちゅーことで。仲良しこよしの勇者たちじゃあ、遠慮してだーれもアタックできんやろな？ やらしーことしよんな、うちー」

「これだから桐生さんには隙を見せられんのだよ」

「褒め言葉として受け取っとくで」

「なんだか難しい関係なのね……亜耶ちゃん？」

「うーん……うーん…」

「ハハハッ！つまりやな……ウチらは大人なカンケーっちゅーこっちゃ、あややん…」

「お、おとななかんけいというのは……ええと……//」

「亜耶ちゃんに変なこと教えないでください！！」

「純粹っ子なあややんには、ちいと早かったなー！」

「言うて桐生さんもびゅあやんやと思いますけどね。巫女だし」

「なっ、なに言うとの」

「勇者巫女に選ばれるということはそういうことなんですわ。すなわち、いくら桐生さんがそのびゅあっぷりを隠しても神に保証されているのである。おい鏡見てこいよ、びゅあびゅあ神樹保証マーク付いてんで？」

「…があああああっ！むかつくこいつー！！！」

「一応褒めてんだぜ？……それに純真さを棄てたければ、神樹の巫女を辞めてワタシのものになればよい。…たしか身体でご奉仕してくれるのだったな？……クックックッ…！期待しているぞ桐生静……」

「殴りたいこの笑顔…！！」

「不純異性…？交友は許しませんよ楓さん」  
「女の子？やぞ」  
「自分で疑問符付けてるじゃないですか」  
「なんとなく以前のまま呼んでるけど、楓くんは、楓くんと楓ちゃんどっちがいいのかな？」  
「ああ神奈さん、今日は静かさんでしたね」  
「ふはっ！不意打ち…！」  
「こんにちは、神奈先輩♪」  
「こんにちは亜耶ちゃん♪」  
「うっちー自身としては男なん？女なん？」  
「どっちでもよくないですか？肉体無いし」  
「いやー、やっぱちょっと気になるやん？ なっ？ブッキー」  
「まあ多少は…」  
「私自身としては凄くどうでもいい。性嗜好も元から両刀というか無だし」

「…よいかね諸君。性別なんてものはだね？」

分解すると『身体的特徴』と『性的嗜好性』と『振る舞い・装いの趣向』の三要素であり、私の場合、まず肉体が無いため身体的性別が無く、次に私が他者を好くかどうかは私の意思のみで決定されるため特定の嗜好が無く、振る舞い装いも特に執着が無く、男装女装どちらでも気にしない。見立てが合うならどちらも好む。つまり三要素が無。つまり私に性別などという野暮な概念は適用されないのである。強いて言うなら『私は神』だ

性嗜好と性指向を呼び分けろ？人ジャンルの男指系・男血管系・女脚部系・女乳房系が好きとかその程度の差だろ。大差ねえよ。サピエンスしか愛せないとかマニアックすぎるわ。

「だいたい異性交配しかできなかった西暦とは時代が違うんですよ？」

今更、なに些末なこと気にしてんですかお嬢さん方」

「うちの頃はまだ都市伝説くらいなモンやったけど…

神世紀 300 年はそこまで進んどるんか……ジェネレーションギャップ…」

「まあ同性で自然交配できないのは変わらないせいか、価値観の移行は不完全ですけどね。

性別なんて実体のない観念、とっとと捨てちまえばよいのに」

「何か嫌な思い出でもあるんですか…？」

「履歴書やらお役所書類やら諸々に性別欄が残っているのが気に入らない。

女体男体の記載というだけならまだいいが」

「そこは変わってないんやな」

「役所は慣例重視の仕事柄、保守的なのよな。西暦の頃よりは緩くなっちはいるらしいが」

「うーん…そんな難しい話じゃなくって、楓くんが呼んでほしい呼び方をしたいだけなんだよー…」

「神奈さんの好きな様にお呼びよ。名前も象徴記号程度にしか見てないから割とどうでもいい」

「自分のことに対して投げやりやな」

「そんな些細なことで自己が揺らぐようじゃ義体にはなれませんか？」

「別になろうと思わんから…自分かて事故で義体になったんやんか。

ソレで満たされとるんか？」

「……………むう…」

「あの…楓先輩…。楓先輩は、もっと楓先輩に優しくしてあげてほしいです…『なんでもない』と楓先輩は仰いますが本当でしょうか？ 辛くはありませんか？ 苦しくないですか？ 寂しくないですか？ なんでも相談してください楓先輩」

「ぬっ…」

「楓さんは嘘を吐かない頑固者。ということは『愛されたい』というのも実は本気なんですよね？」

「なんや冗談めかしといて、肉体健在やったらホンマにウチとあーんなことや、そーんなことしたかってんか。プスクク…！むつつりさんやなあ？うっちー ぷくく！」

「楓くんって実は、誰にも甘えられなかったせいで甘え足りない甘えんぼさんだから…」

「楓先輩は邪神様なのに、実は可愛い方だったんですね♪」

「うあああ…、やめろー…母性で包み込もうとするなあー……………あー……………あー…ア…」

「死にたい…」

「死なせないよ！！」

「自殺したい…」「させないよっ！」

「おのれえ…」「ふふん！」

神奈

それから、楓ちゃんは黄泉平坂(よもつひらさか)の在りかを樹海だと目星を付けました。

樹海もただの樹海ではなく、真夜中に発生した樹海です。

あの世の別名を沖つ国と言います。

真夜中の海では、天とを別つ水平線が見えなくなります。消えてしまいます。

つまり、あちらとこちらの境界が曖昧となるのです。

夜の水場に死霊が現れるのは、そこに幽世(かくりよ)への入り口があるからなのです。

楓ちゃんは

雀ちゃんたちの話から、中立神様の影響下にある樹海には泉があることを知っていました。

死んでしまっって黄泉へ下ることを『泉下の客となる』と言います。

楓ちゃんは泉の底で意識を手放しました。

義体の楓ちゃんは本来眠ることができません。

けれど楓ちゃんには止瞑想の技術があります。止瞑想は魔境に繋がることも聞きます。魔境に堕ちて帰って来られなくなるから、仏教では必ず瞑想する人と起こす人を用意するんだと楓ちゃんが言っていました。

義体になる前に黄泉に下りたのも樹海だったので『一度繋がったのなら、もう一度繋がる可能性は高いだろう』と楓ちゃんは言っていました。そして、実際に泉の底で意識を手放し、意識を沈め、無我となることで楓ちゃんは黄泉路を下ることに成功しました。

どこまでが中立神様の思惑なのかな…？

こんなお役目をこなせる都合の良い人……偶然じゃありませんよね？

そして………帰って来た楓ちゃんの様子がおかしいんです…

いつも上の空で、みんなの会話に混ざろうとしないし、みんなが話しかけても事務的な答えしか返してくれません…。何があったの？って聞いても、曖昧に返事をするだけで教えてくれません……………心配です……………

相談してほしいよ…

今月中に、楓ちゃんが二度目の黄泉下りを行います。  
私は神樹様から離れられないので、着いて行くことができません——



瞑想の並び。夏凜・若葉・・楓。まず若葉さんが座り、その隣に少し距離を置いて楓が横に着きます。まだ殆ど初対面ですしね。夏凜さんはまだ楓を警戒しているので空いている若葉の隣へ。10 数分して園子さんがやってきます。若葉さんの隣に座りたいけど夏凜と若葉の間は空いていないので、若葉さんと楓の間に入ります。夏凜・若葉・園子・楓。2 時間経過して芽吹さん入場。当然夏凜さんの隣に座りますよね。これは説明不要でしょう。最終的にこんな並びになります。「芽吹・夏凜・若葉・園子・楓」。若葉さんメッチャ書き易いすね。

#### ●ナモノばなし

オーストラリアだかの野良猫解剖報告で「胃袋からトカゲが 40 匹出てきた」ってのがありまして、猫の消化スピードは凡そ 8 時間程度と言われています。まあ単純計算で 40 匹/日として、捕食数を半減させても月 500 匹とかですね。毎日そんな狩れるとは限りませんが、例えば猫が 1 日に必要とする熱量をネズミ換算すると 6~8 匹です。実際に狩れる頭数を低く見積もって 4~5 匹/日としましょう。それでも月 100 匹計算になります。ちなみに猫は遊びでも殺生する動物ですからその辺りも念頭に置きましょうね。繰り返しになりますが【生きるとは食うことであり殺すことであり、生かしたり生き続けるとは即ち殺し続けること】なのです。環境省からも「オキナワトゲネズミ(絶滅危惧種 IA 類)等を捕食していた猫の糞便内容物を調べると、人工飼料が多くを占めていた。つまり人間に餌付けされている猫も山に入って狩りを行う」と報告が出されています。山原や西表島みたいな特別重要な場所でもなくとも同じことです。日本という国はそれ自体が島国であり、北から南へと寒暖差や気候が異なり、山脈による高低差もあり、川も急流から緩やかな所まであり、湿地帯も豊富で、世界的に見ても特別固有種数も多く、多様な環境と多様な生物種が住まう特別な場所なのです。マダガスカル島の生態系が特別視されているのは、興味の無い方でもそれなりに認知されているのではないのでしょうか？日本はそれに匹敵します。地域猫なんて遣ってまますがあれは「情緒に最大限配慮した緩慢な殺処分」ですからね？本分を違えないでください。あんなの遣ってるのは猫だけですだからね？効果も特に無いのに凄い特別(差別)扱いです。相手に罪が無くとも、害があるなら対処しなければなりません。駆除作業とは全て、そういう話です。『生き物が好き』と仰いますが猫だけが好きなんですか？本当に猫が好きなんですか？本当に生物好きなんですか？あなたは単に“人間が嫌いなだけ”ではありませんか？

そして希少種というのは何処か遠い特別な場所に居るものではなく、近所の裏山だったり、溜め池だったり、用水路だったり、土の中だったり、ひっそりと生きづいているのです。たまには、のんびり道草喰ったりしてみませんか？あなたの運が良ければ、不思議な出会いも在るやもしれません。そして肝に銘じていただきたい。希少種だから価値が高いのではないのです。現在、希少種となっているものたちも以前は普通種だったのです。生物であるという時点で本質的に価値が内在しているのです。すべての希少種が普通種となることが理想的です。近所の公園で虫取りでも如何ですか？何処にでもいるバッタや、コオロギや、ハチや、ハサミムシなども先入観を忘れて良くご覧下さい。きっと新しい発見が有るはずです。苔なんかも素敵です。だからと言って採り過ぎないでください。苔は刻んで蒔く

だけで茂るものなのだそうです。ハイゴケなどは乾燥にも水没にも強いですし、手触りモフモフで入門によいでしょう。気の長い方は盆栽なども風情があってよいですよ？樹だけに

本来、誰とでも直ぐ仲良くなってしまうひなたさんですが、ゆゆゆい時空での最近は覇気遣いになっておられますしね…描写されてないだけかも知れませんが、使命によって変わってしまう自身に戸惑うこともあるのではないのでしょうか？強い若葉を育てたのはひなたさんですし、若葉さんの中にあるモノの多くは元々彼女の所有物なのでしょう。『日向と若葉』ですからね。【日を受けて 天(そら)に葉向かう 若草よ】咲誇れ。そして、そのっちさんとひなたさんって本当に凄く似ているんですよ。二人とも他者に非常に寛容であり、自身に対して厳格です。人の好みも大体同じでしょう。ひなたさんの日常回ほしいよね。

カウンセリングお悩み相談受ける時対面に位置取ると相談者に威圧感を与えてしまうため、八の字もしくは隣り合うようにセッティングしましょう。ただ横着けは受容にはベストですが意見交換が難しくなるので私は八の字を良く使用します。勇者の章 11 話は一人を取り囲んで孤立を極める立ち位置でえぐいっすよね。その点、友奈ちゃんは必ず相手の隣にポジション取るんですよ。あなたのすべてを受け入れるぜって強い意志を感じます。素敵ですね。まあ、いざとなりゃ顔面パンチで相手の感情の振り子を全力でぶん回して引き戻したりしてましたがあんなん乾坤一擲(けんこんいってき)、伸るか反るかの大打。ゴッドハンドの所業ですわ。とても真似できない。友奈たちはみんなのカウンセラーで、カウンセラーのカウンセラーが居なかったがために人間離れした自己が必要だった。自分の全てを認めてくれる依存対象が必要だった。私も鬱復帰に必要で用意したことがありますよ。ちょっと不安定な相手の方が落ち着きますよね？自分に妄執的なくらいでないと不安になってしまいますよね？あなたのためにと自分の存在意義を立たせないといけない気がしますよね？さて、その子を愛しているから君は頑張るのかな？それとも自分を振るわせるためにその子が必要なだけだったのかな？高嶋さん君はどっちだったのかなあ？否定しなくても同じさ。君たちは『勇者』という厳しい戒律を設けている。君のその言葉が君の自由意思によるものだったのか『勇者』が喋った言葉だったのか既に君には判らない。赤嶺ちゃんは少し気が付いているのかな？自分のズルさを気にしているみたいだね？ポディビルダーはナイーブな人が多いけど、君の筋トレはただ趣味だけなのかな？ようするに君たちは強烈な自己暗示自己催眠をかけていると謂える。私との違いはクズかクズでないかくらいですか？まあ私は常に崇られ状態ですが。ふふ。私と違って、お友達がアキレス腱なんですね。友奈ちゃんは可愛いですね。安心して下さい。たとえあなたの黒髪たちが死んでも、死なない白髪の私たちが世界が終わるまで永遠に愛し続けてあげますからね？ふふふふふ。by 邪神。 なーんて…のわゆ下巻を読んだ限りでは、ただ怖かっただけみたいだけどね。後続の友奈たちは友奈因子が、どういう形で継承されているのか次第だね。友奈因子と一言に言っても、振る舞いが友奈であれば良いわけだからね。場合によっちゃ魔王や邪神にだって成れるのだから。 フヨウ友奈。たのしみね。

そうそう、友奈の中の『勇者（無意識・無人格・呪縛・観念・実体無きもの）』に名前を付けて『幽鬼友奈』なんて反転属性強めで素敵だと思いませんか？光は鮮烈に強く射すほど深い影を産み堕とすものです。古来『影』という言葉は、陰りの部分ではなく光を示す言葉でもありました。そしてスクリーンに影を映し、投影した影の主と別の動きを影に取らせるという臨床実験がありましてね？被験者の方々みんな影に釣られて動いてしまうんですよ。面白いですね？いつも其処にある不可分な事象は主従が揺らぐほどに境界が曖昧なんですね。あなたは自分の影だと思っているようですが、本当は、あなたの方が主である影法師の真似をしているだけなのかもしれませんよ？自分の意思で選択していると思込んでいるだけで、意識の奥底に坐っているナニカに選ばされてはいませんか？あなたに自由意思は本当に存在していますか？表には裏を。白には黒を。陰には陽を。希望には絶望を。生には死を。光には闇を。ものごと観念概念には対となるものを設けなければ存在が安定しません。どんなに明るく日が射しても陰影明暗を付けなければ何者も観ることは叶わない。それは真っ白に眩しく輝く暗黒であり常闇なのです。故に一つの概念軸の両端は容易に反転し得る。無が相転して有と成り宇宙と成るように。不安定な物差しの端で(はて)を識り、中道へ向かいましょう。いつも傍に寄り添っている絶望を親友の様に愛して希望を語りましょう。死に逝くものを称えて、生まれ出づるものを謳いましょう。他者を傷付ける刃を持たないのではなく、刃を持ちその上で傷付けぬと懐にしまいましょう。手段を持たないのではなく、手段を持った上で用いないのが意志力と私は考えます。神聖な勇者たちに対して、穢身(えしん)であった楓さんは黄泉送りに持って来いですね？

疫病、天災、不況、戦の予感と、宗教の布教に都合の良いこのごろですね。シャーマンキングも再アニメ化しますし、セクトやらカルトやらに引っかけられないために仏教で免疫を得るとよいです。恐ろしいなればこそ知りましょう。しかしだからと言って原ウイルス打ち込んではなりません。きちんと弱毒化処理してから打ちましょう。それがワクチン予防です。

そのっちは諦観と強靱な理性で己を律しているのです、逆に言えば、その理性や合理や理屈を『ヒヒン！』とブチ抜かれると柔らかいんですね。普段みんなを、お道化て引っ掻き回しているのも攻守の経験値に偏りが生まれています。いつもは攻めの子が、ちょっとした隙を突かれて下克上されるとか良いですよ。色々からかうけど、いざ真に受けられるとどうすればいいのか分からなくて狼狽えたり、とてもえっちで素晴らしいことだと思います。…なんですか、そのっちさん絡ませようとするラブストーリーになってしまうんですよ……イタズラする側と、イタズラを叱る(けど満更でないから手心が加わる)側で、手心がちょっとくすぐったくって、それを見て叱る側も余計に惹かれてしまってその言外のやり取りが嬉しくて、止むを得ずぬくりにした空気が生成されてしまう的な？なんでも持っているのに、銀の蘇生や記憶、本当に欲しいものにはいつまでも手が届かない者。何も持っておらず、何も与えられない者。貴族・富豪とホームレス。家に縛られる者と、家の呪縛を破

った者。だけど少し性質が似ている者。二人とも分かり難い奴だから自分のこと理解してもらえないのかメッチャ嬉しいよね。バランス的には相性良いが、校閲中「マジな感じにラブコメしてんじゃねええええ!!!かえでしねえええ!!!」って感じだった。最悪不都合な部分とか、ご都合的などことか全部穢れの影響ってことにしちゃいましょう。『私は何も知らないけれど、知った風な口を利くのは得意』なので、なんやかんやで理屈をこじつけますが最終的にどうにもならん場合は、どうにもならんものどものせいにしてしまひましょ。身の程を知れというのなら、無力を理由に責任を押し付けてやらあよクソ GOD。…まあ「あなたは=救われて」では真ヒロイン役なので良いんですけど……多分、夏風(棗×風)レベルの尊い風が吹かせられるはずのそのっちゃんなのに、ようやく公式でそのわかフラグ一本なんて、ひなたさんいるから絶対に交わらないし、結局誰とも線を越えられないなんてせつないですなあ……自己愛(園園)はロマンスには含みません。私自身が自己愛野郎なのでソレの寂しさを知っています。尊いけど切ないです。切ない嘶大好きですけど幸せになってほしいです。救われろ。いずれは、そのっちゃんも東郷さんくらい我を通せるようになってほしいですね私としては。まあ仕方ないのかな…。ついでに勇者部員同士の命を天秤に乗せられて、自身を代価にしても絶対にどうにもならないような場合、楓さんは多分、最終的に両方を選んで両方とも自分の手で殺します。基本的に生存率の高い方を救助しますが、そういった差も無い場合、楓さんは平等主義とは程遠いですが公平なので、多分、殺してしまえます。

…

ちょっと思ったんだけど、山伏さんカップリングするとしたら「シズしず」でなく「しずシズ」に成りそうじゃないですか？どちらもシャイガールで、シズクさんの方がパワフルで真も強いけど、荒っぽい振る舞いなので好意的視線には非常に弱い。これはあれですね。しずくさんには手が出せないし気恥ずかしいけど拒絶もできないので、しずくさんに請われるまま受け入れて押し倒されちゃうやつですね。「ふふっ…シズクじゃないみたい…シズクかわいい…」とか囁いたりして唇を触れ合わせるだけの啄むような切ないちっすを繰り返すんですよ。そしたらもうシズクさんのほうも出来上がっちゃって、初めの方は「なんでこんなこと…」とか、自分が庇護すべき対象に組み伏せられてしまったの混乱とか色々複雑な感情にさいなまれていたのに、段々と思考が蕩けてきてシズクさんから欲しがらるようになって攻守が逆転するんです「しずくっ…!しずくっ…!」っと甘くて熱く名前を呼びますと小動物のようなしずくさんが「シズク……すき…」なんてこれまた切なくシズクさんを求めるのです。シズクさんはもうだめだ。荒っぽいロールですからね。熱くて熱くて密な接吻を交わします。えっちですね。初めての感触に二人とも病みつきになってしまって何時間も何時間もどちらからともなく求め合い舌を繋ぎ合い唾液を交換し合います。いやん、もうえっち。二人はどこまで行くのかな?いいえ何処までも行きましょう。そしてこんな文章を当人たちに読ませたときの反応なんかを想像すると本当に愉悦極まりますよね。そうですね。怖がらせるだけじゃなくこういうのも悪くない?駄目か。それじゃあシズクさん呼び出せないわ。 あっ。 ホラーかつ、セクシーなやつとかどうだろう?面白い挙動しそう。

タマさん自分のことを少年みたいだとか言ってますが、思い遣り深くて感情に素直で明るく振舞って、可愛いものにも憧れているのに自分なんかと遠慮してしまう。そんな素直可愛いくて、いじらしい球子さんを私は愛しています。実はタマっちさん勇者部の中でも常識人枠だと思うんですよね。ビバークへの執念はちょっと異常ですけど、それ以外はよくあるコンプレックスを持ちながら自分にできる範囲を前向きに、偽らず、しかし決めたことは無理してでも貫き通す一本筋の通った所もある面倒見の良い女の子。素敵ですね。きっと、もっともっと素敵なところが増える。成人後のタマさんは落ち着いた凛々しい人になるのか、ニッと不敵に軽快に笑う明るく可憐な美人になるのか将来が楽しみです…

ナッチーさん寡黙でちょっと天然で、会話はいつも少し遅れて反応してしまうけど、いつも落ち着いて相手の心に寄り添える棗さんは本当に素敵な方だと思います。海を渡って四国に島民を護送したとは言うが……………おや？壁の外が火の海になってから送り届けたことになるのか…？壁外生存者受け入れなんてイベントを大社が見逃すわけないよな…？…おや？時空が歪んでいるぞ？少女の内しか神威を振るえないのなら赤嶺とも直接面識はないのだろうが、伝説上の人物として語られている？……海…？

補足。楓さんは義体は在れど運動の疲労感は何れられないし、歩いたり掴んだりに必要な最低限の圧力センサしか無いので、勇者たちを抱き締めても肌の感触も温もりも感じられないし、根本的に、身体を動かすというより影法師を操っている感じです。幻肢痛の要領で義手に宿るという偽感触(感触は無いけど触られている感じがする・錯覚)は生じていますが、基本、影や鏡の中の虚像に何か干渉しても肉体(意識)には伝わりません。また、現状どのようにして意識が義体に宿ったのか不明なので再現性が無く、維持の方法も不明なので、数秒後に事切れても不思議はありません。タマさんを宥めるときは、子供にするように視線を低くしまして「なら…」のときは、背中に隠してハンドサインを銀さんたちに送っていました。得物は鉈と杖が馴染み深いですね。魔法的なやつでなくて杖術です。仏教徒なので。

「卑屈だ言う割に自信過剰では？好かれてると確信してんの？」みたいなのは、例えば【好かれている人に余所余所しくされる／嫌いなやつに距離を取られる／好きな人に好きだと言っても信じてもらえない／嫌いなやつに嘘のラブレター送っても無反応】というように可能性を考えたとき、好かれていると思って対応した方が万が一のとき相手を傷付けるリスクが少ないです。それで煙たがられても「まあ、誰も傷つかずに済んだんならそれでエエか」なのが楓さんです。卑屈なので嫌われることに頓着しないのです。自分による自分の解釈が一番自分を貶めているので他人の頓珍漢な罵倒とか誹りとか虚無と大差ない。地獄の最下層より下に落ちることはできないのです。ハンマーソングが聞こえない痛みの塔で、ポッチを拗らせて神になるのです。嗚が全体的に気持ち悪い？わかる。キモ過ぎて鳥肌モンよな。そんな投影と憐憫と欲情漬けのゲロきもい長大な独り言を読破してまうとかアンタ良い人過ぎんか？なんやウチのこと好きなんか？ラヴなんか？どうする結婚する？

だが断る。

神樹信仰にズブズブな亜耶ちゃんに神嫌いの芽吹と楓と、なんとなく反体制派に寝返って赤嶺に鎬矢されそうな静さんを宛がってみました。紫属性やしなんかあるやろ感。なんとなく弥勒さんは静さんに鎬矢できなさそう。石碑に名前……あったような…気もするけど…むしろ逆か？『こんなやり方は間違ってる！』とか言って、鎬矢した市民を救済して廻っちゃうのか。若婆没後大赦ブッチして衆生済度に走っちゃうのか弥勒さん。好き。名前の呼び方一覧表が欲しいですね。暫定的になんとか呼び易いあややんにしたけど、アーヤの方が当たりな気がする。そのっちさんが良くて、きりりんが違うのはなんでなんか言うと、勇者と魔王が対称なのもそうだけど、静さんはお巫山戯を足踏みしてしまうところあるんよな。『ほどほど愉快ならそれで良い』とか『そこそこ愉快で平穏平和なのが一番』とか思ってそう。調和を望んでそう。知らんけど。『何故ベストを尽くさないのか。どうせなら全力でハジケようぜ』なのが勇者であり、思い切って皆殺したり世界を滅ぼしちゃうのが魔王なのです。勇者も魔王も極端なのさ。踏み込みが甘いぜ、静。まあそこが良いんだけどね。好きよ。

どんなに書き易くても、私の中に生まれた勇者(かのじょ)たちは虚妄で本人たちではないので不正確だし、内心描写まではできないですよ……私には他人が解からない。特に友奈たちは遠すぎて理解できない。何を考えているんだ？ 友奈以外で友奈に一番近いのは園子だと私は思うが園子は分かるんだ……結城友奈はキャラソンを聴いても、投げやりなくらいに前向きなのと人好きなのは分かるが…振る舞いの根源が分からない…もう少し周りを信じて隙を見せてほしいな…いつもそうだ君は、本当に辛いときほどそれを表に出そうとしない口にしな「心配させたくないから」と「自分は勇者だから」と……みんなあなたが好きなんですよ。心配かけられるのは迷惑なんかじゃない。

私たちにお節介を焼く機会を下さいよ結城さん。もっと私たちを困らせてください。大好きなあなたのことで一喜一憂させてください。片想いみたいで切ないじゃないですか。まあ私もそういうことしますけど私の場合はそもそも好かれるほど接近しませんし外道ですし冷酷ですし、この私は楓くんではないので、あなた達とは何の接点もありませんが。

岡惚れってやつですな。

黄泉の国篇の構想も既に閃いてるけど、多分ゆゆゆいキャラ出ないから一応オリジナルの体で上げることになるんじゃないかなあ。病み成分・煩惱・三毒マシマシで、とてもキモチワルイ文章にしたいな。楓さんは勇者たちに対する写し鏡で、境界で、魔鏡である。勇者の在り方を示すこともあれば、その在り方によって生ずる闇を映し出すこともあるし、弱所・未熟さ・無力さ・後ろめたさ・劣等感を引きずり出して眼前に突き付けることもある。

“ネタ被りしてしまう可能性はもう良いのか”って？

万が一被っても、そこは筆力の差で「きっと上位互換に仕上げてくれるだろう」と信じてことにしました。なんてたって私のこれ処女作ですからね。きっと大丈夫です。